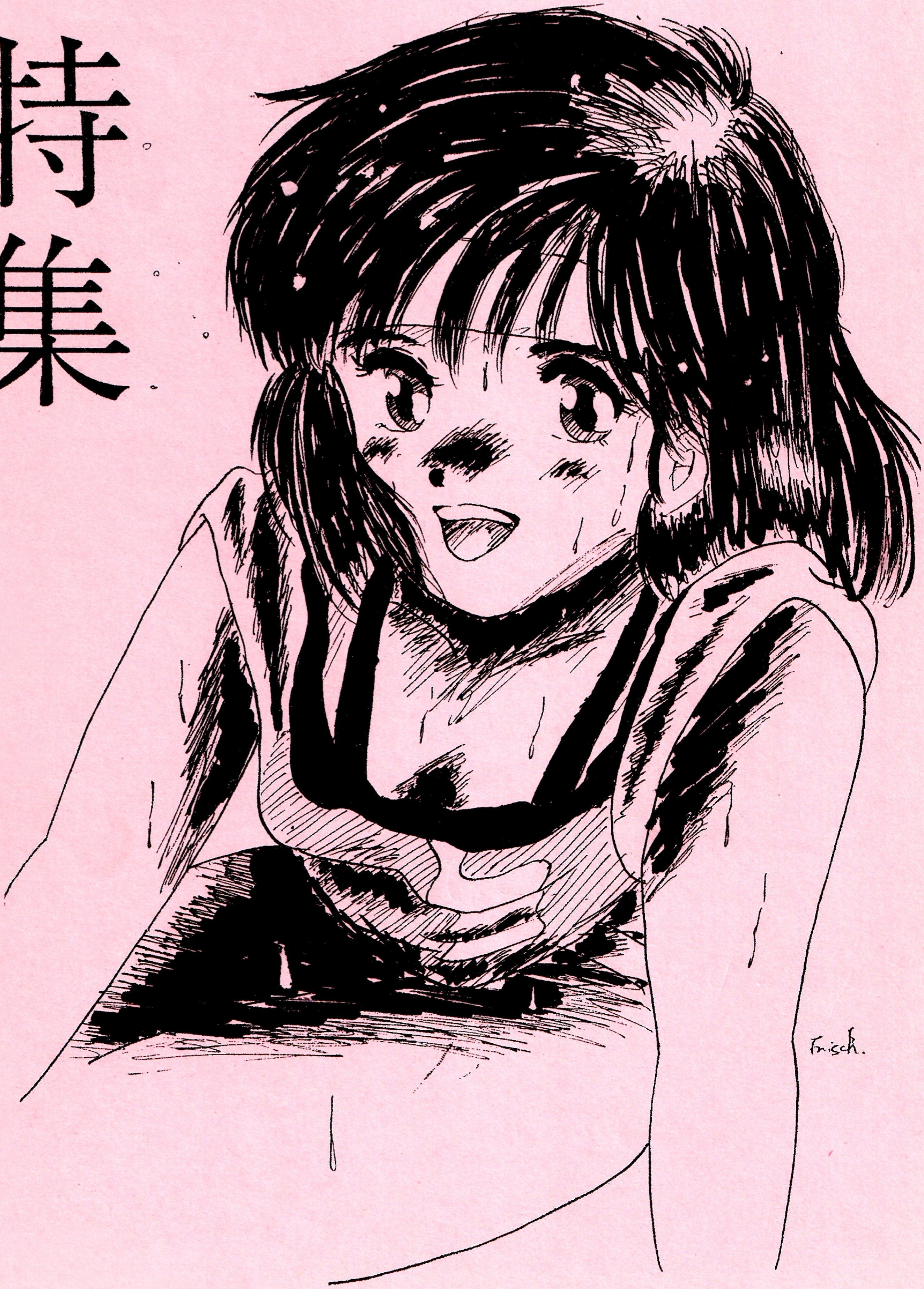
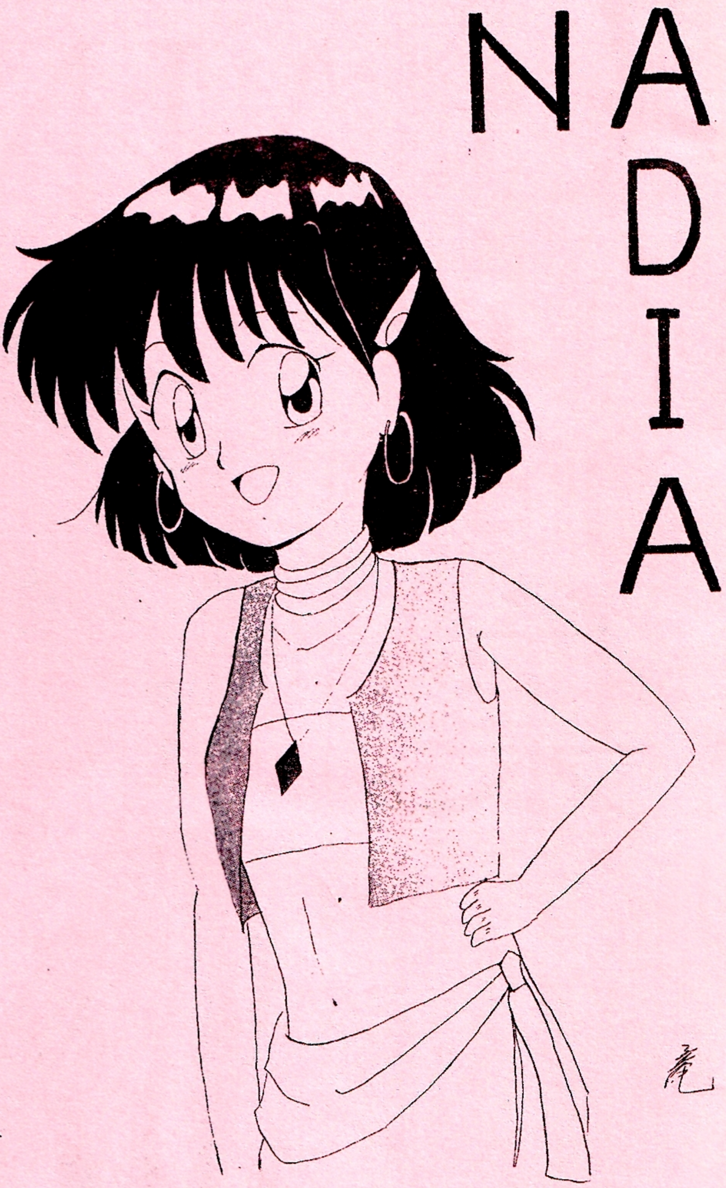
GAINAX

特集





目次

ふしぎの海のナディアあらすじ

他に比べてずいぶんと長いあらすじになってしまいましたが、これはナディアが二日間にわたって上映されるということと、特に前半部については、連続ものであったために途中経過が分からないと見にくいであろうという配慮からです。いたずらに長くなってしまいましたが、読みたくない部分ははしょって下さって結構です。

第１回　エッフェル塔の少女

おじさんといっしょに飛行大会に参加するためにジャンはパリにやって来た。ジャンはセーヌ川の岸で見かけた少女・ナディアに一目惚れしてナディアを追いかける。だが、ナディアを追いかけているのはジャンだけではなかった。ナディアのもつ宝石・ブルーウォーターを狙って、グランディス達もナディアを追っていたのである。

そんなことは知らないナディアはキングといっしょにエッフェル塔で自分の故郷がどこかに思いを巡らしていた。そこにジャンが現われてナディアにいろいろと話しかける。でも、ナディアは全く相手にしない。そんな時、突然ブルーウォータが点滅を始めた。危険を感じたナディアはその場を立ち去ろうとするが、グランディス達が立ち塞がる。襲いかかるサンソン・ハンソンをナディアは持ち前の身のこなしで振り切って、エッフェル塔を離れる。ジャンに「さよなら」の一言を残して…。

（♪ THE SECRET OF BLUE WATER～）

ナディアの身のこなしとキングの存在から彼女はサーカスにいると思ったジャンはサーカスに行く。果たしてそこにはナディアがいたのだが、グランディスたち３人組もやって来ていた。強引に捕まえようとするグランディス達からジャンはナディアを一度は助けるのだが、ナディアはグラタンで空に連れ去られてしまう。しかし、ジャンは自分のグライダーでなんとかグラタンに追い付く。そしてキングの活躍が手伝って、ナディアを救出しグラタンの脱出に成功するのである。

こんなことがあってか、ナディアはジャンに対して心を開き始める。一方ジャンはサーカスに帰れなくなったナディアといっしょに自分の住んでいるルアーブルに船で向かうことにするのだった。こうして、彼等の冒険は始まったのだった。

第２回　小さな逃亡者

ルアーブルに向かう途中、ナディアは飛行機に乗って自分の故郷と思われるアフリカに行きたい、とジャンに話していた。そこにグラタンが水上モードで出現し、ジャンの船はグラタンに捕まってしまう。だが、ジャンの発明のおかげでジャン達は３人組から逃れることが出来る。ナディアは「すごいわ！ジャン」と感心するのだが、船は途中で調子を悪くしてしまうのである。

なんとか着いたルアーブルでは、おばさんがナディアを泊めることを露骨に嫌がったので、ジャンはナディアを自分の家に泊めることにした。翌朝、ジャンは自分の発明した飛行機をナディアに見せ、飛行機でナディアをアフリカまで連れていくことを約束す

る。

しかし、ジャンとナディアとの仲が良くなる場面になると現われるのがグランディス軍団である。3人組がブルーウォーターを手に入れようとグラタンで威嚇射撃をするなか、ジャンはナディア・キングと共に飛行機で逃れようとする。不安がるナディアをよそにジャンは飛行機を発進させ、なんとか空を飛んで3人組から逃れることに成功する。海上を飛行する飛行機の上でナディアは再びジャンに感心するのだが、ナディアの不安は的中し飛行機は故障して海に着水してしまったのだった。ナディアいわく「感心して損しちゃった」だそうである…。

第3回　謎の大怪獣

飛行機の故障から海に着水したジャンたちは、アメリカ軍の戦艦に救助された。アメリカ軍は世界の海を騒がせている謎の海獣を倒すために出航していたのだった。そこでジャンとナディアはエアトンという自称海洋学者の青年に出会う。一方そのころ、グランディス軍団はブルーウォーターを追って海にグラタンで出ていた。偶然、戦艦上にジャンの飛行機を発見した3人組は戦艦に接近するが、火力の違いから相手にならず投降する。

その夜、戦艦は海獣2体に遭遇した。どうやら一方がもう一方を追っているようだった。戦艦はそのうち1体に砲撃を加えるが、海獣は直撃弾を跳ね返してしまう。そして逆に戦艦は海獣の体当りと魚雷によってやられてしまい、ナディア達もグランディス一味も海に投げ出されてしまったのであった。こうして再びジャンとナディアは海を漂うことになってしまった。

第4回　万能潜水艦ノーチラス号

海を漂っていたジャン達は謎の海獣に飲み込まれてしまう。しかし、ジャン達が海獣だと思っていたものは万能潜水艦ノーチラス号だったのである。ノーチラス号はもう一体の海獣=ガーゴイルの潜水艦を追っていた。そんな中、ノーチラス号の乗組員エレクトラはジャンとナディアの面倒を見ることになり、彼等に部屋を与える。その部屋でナディアはジャンに、自分の出生を知る手がかりはブルーウォーターしかない、と話すのだった。

それから3日が過ぎたが、ジャン達は部屋から出してもらえない。そこでジャンは通気孔を通って外に出ようとする。そんな時、ノーチラス号はガーゴイルの潜水艦を発見する。ネモ船長は潜水艦を追跡してガーゴイルの基地をつきとめるため、無音潜行で一旦やりすごそうとする。しかし、通気孔の中にいたジャンの立てた音が敵のセンサーにかかってしまう。逃がさないためにノーチラス号は攻撃を仕掛けるが、敵の放った妨害物質のためにガーゴイルの潜水艦に逃げられてしまったのだった。

海上に浮上したノーチラス号の甲板に出たジャン達はエレクトラから水上機に改造された飛行機を受け取る。ノーチラス号から飛び立った飛行機を見つめて、エレクトラは「さようなら、お姫様……」とつぶやくのだった。

第5回　マリーの島

ジャンとナディアはノーチラス号で改良してもらった飛行機で近くの島に向かっていたが、突然砲撃を受けて墜落してしまう。偶然にも同じ島でその模様を見たグランディス達は、飛行機が墜落した場所に向かうが、そこで仮面を被った謎の集団＝ネオアトランティスに包囲され捕まってしまう。一方、ジャンとナディアは幸運にも助かり、はぐれたキングを探していた。その途中、道に３人の人が倒れていた。大人２人はすでに死亡していたが、女の子は気を失っているだけだった。その女の子はマリーというこの島の住人だった。そして、両親の死のことをまだ知らないのだった。

キングと出会ったジャン達はマリー一家が行こうとしていたむかしの村に行ったが、ネオアトランティスに発見されてしまう。ジャンの機転で逃げ切った一行は岬の洞窟に行って、そこで夜を過ごすことにした。マリーが寝付いた後、ジャンとナディアはマリーの両親の墓をつくる。その頃、ネオアトランティスの指導者ガーゴイルは捕まえたグランディス達からブルーウォーターをもったナディアがこの島にいることを聞き出し、ナディアの捕獲を命ずる。

そして夜が明けて、マリーはその墓の前で、両親の死をしらされるのだった。

第6回　孤島の要塞

マリーの話を元に、ジャンは島の偵察をしていた。そこでジャンは、ネオアトランティスが高度な科学力をもつことと平気で人を殺す集団である、ということを知る。洞窟に戻ったジャンは今後どうするかをナディアと話し合うが言い争いになってしまう。「夫婦げんかしているの」と口をだしたマリーは２人に怒鳴られて洞窟から出ていく。だが、キングと一緒にネオアトランティスにつかまってしまう。それを知ったジャンとナディアはマリーを助けるため、ネオアトランティスの基地に潜入する。その基地には巨大なガラスの塔や海で出会った海獣＝潜水艦があり、ジャンは敵の優れた科学力を再確認する。

その頃ガーゴイルは技師が製作した人造オリハルコンの点検をしようとしていた。ガーゴイルがオリハルコンに触れるとオリハルコンは今までにない反応をしめし、同時に隠れていたナディアのブルーウォーターも激しく輝いた。そして、その光のためジャンとナディアは兵士に発見され、包囲されてしまう。敵の砲撃で足を怪我したジャンを逃がすため、ナディアはブルーウォーターをジャンに託し、囮となるのだった。

第7回　バベルの塔

兵士に捕まったナディアはガーゴイルと対面していた。ガーゴイルはマリーとキングを人質にとり、ナディアからブルーウォータのありかを聞き出そうとする。ナディアはなかなか答えようとはしないが、最後にはマリーとキングの命のために、ジャンがもっていると教えてしまう。そのころ、ジャンは基地に忍び込んでいた。一方、牢屋に入れられていたグランディス達はなんなく牢屋から脱走する。

そして翌日、ガーゴイルはバベルの塔の実験を始めようとする。バベルの塔とは加速

した高エネルギー粒子を天空に発射し、宇宙にある人工衛生で反射して地上を焼尽くす兵器である。ガーゴイルの指示のもとバベルの光は発射され、近くの島を消滅させてしまう。島の近くにきていたノーチラス号は高エネルギー反応を検出し、ネモはバベルの塔の完成を知って驚く。そして同じバベルの光を見ながらも、ガーゴイルは「世界をふたたび我らにひざまずかせる神の光だ」と言い、ネモは「世界を滅ぼす悪魔の光だ」と言うのだった。

第8回　ナディア救出作戦

バベルの塔の実験の最中、ジャンとグランディス達は出会ってしまう。ナディアが捕まったことを知ったグランディスはジャンと協力してナディアを救出しようとする。ハンソンがグラタンを取りにいっている間、サンソンの怪力で敵ロボットを倒し兵士の服を手にいれてグランディスとサンソンは敵兵士に変装する。そして、火力発電の冷却口を塞いだあとガーゴイルの呼びだしに応じて、ジャンは変装した2人とともにガーゴイルのところに行く。そこで、ブルーウォーターのありかを教える前に兵隊を下がらせたところで、変装したサンソンが銃でガーゴイルを脅し、ナディア達を自由にさせようとする。しかし、ガーゴイルの周りには硬化テクタイトが張ってあり形勢が逆転してしまう。ところが、冷脚口を塞がれた発電所が破壊され停電が起きる。その時、さらにタイミングよくグラタンが到着する。予備電源が入ったときにはもうグラタンはナディア達を救出し、逃走していた。

そのグラタンは人型ロボットを蹴散らして、潜水艦の出入り口から脱出するために湖に飛び込んだ。しかし例の潜水艦（ガーフィッシュ）が現われてしまい、歯が立たないので脱出を断念する。その時、水中からノーチラス号が出現！ノーチラス号はバベルの光の発射地点を割り出し、ネオアトランティスの基地を突き止めたのだった。ノーチラス号はあっという間にガーフィッシュを沈黙させた後、バベルの塔を攻撃するがバリアにはばまれて失敗。ガーゴイルはバベルの塔をノーチラス号に使う指示を出す。が、人造オリハルコンが連続使用に耐えられずバベルの塔は暴走して基地は破滅する。飛行船で脱出したガーゴイルはネモに秘密を知られるより基地の破滅の方が損失が少ないと考えたのだった。一方、ナディアを助けたグラタンもノーチラス号も無事に島から脱出していた。そして、ジャンは共に高度な科学力をもつノーチラス号とネオアトランティスが何者だろうかという疑問を抱くのだった。

（以上　大橋）

ノーチラス号での話　その１

ついにノーチラス号に助けられ、行動を共にすることになったナディア達。ノーチラス号の設備に心を奪われるジャンとハンソン、ネモ船長に心を奪われるグランディスとそれを苦々しく思うサンソン、ノーチラス号を人殺しの道具以上の見方をしないナディア、実はブルーウォーターを持っていたネモ船長、そしてナディア達に優しく振る舞いながら、グランディスと争うエレクトラといった感じで物語は進んでゆく。ある時はガーフィッシュを追いつめ、またあるときはガーゴイルの罠にかかりと戦いは続いていく。そんなある日、ネモ船長は久々に丘に上がり補給をすることにした。しかしナディアは、

狩りで狩られた子鹿を叫ぶのであった。「どうして殺したのよ！！」

第１３回　走れ！マリー

いじけてしまったナディアに相手にされず、ノーチラス号のクルーからも遊んでもらえないマリーはキングといっしょに島の奥へと進んでゆく。めいっぱい遊んだマリーであるが、その最中、なんとガーフィッシュを見つけてしまうのであった。ノーチラス号のみんなに知らせようとするが、ネオアトランティスの兵士に見つかってしまう。必死で逃げるマリーを兵士はしつこく追いかけてくる。その時サンソンと出会い、ようやくまいたと思いきや、カニロボットに見つかり二人でいっしょに逃げるのである。ついにノーチラス号の面々と出会った彼女らに、カニロボットの操縦者は発砲してきた。負傷している兵士を撃ち殺すネモ船長。そんあけれにナディアは激しく抗議するのだが、ノーチラス号の乗員の反応も冷たかった・・・。

第１５回　ノーチラス最大の危機

ジャンはノーチラス号で明るくて面倒見の良いフェイトと出会い、ジャンは彼と親しくなる。しかしその時、ネオアトランティスはアメリカ艦隊を使い、ノーチラスに攻撃を仕掛けてきたのだ。集中攻撃を浴び、さすがに傷ついていくノーチラス号。ネモ船長は、死んだふりをすることによって当面の危機を回避するのであるが、その時、攻撃によっていたんだパイプから艦内に有毒ガスが吹き出してくる。その付近ではフェイト達三人が作業しているのである。非情にもネモ船長は、艦内にこれ以上有毒ガスが広がらないようにその地区を閉鎖する。必死でフェイトを助けようとするジャンだが、ついにかなわない。そしてフェイトはネモ船長を責めないようジャンに言い、扉の向こうは静まり返る。しかし、最期の瞬間、彼の悲痛の叫びが船内にこだまする・・・。乗員が死んだにもかかわらず艦の修復を行い続ける乗組員の姿を見て、ジャンはこの船が戦争をしていることを実感するのであった。

第１６回　消えた大陸の秘密

フェイト達を埋葬するために沈める寺院を訪れるノーチラス号。その途中でナディアは自分の運命と、ブルーウォーターについて思い悩む。なぜ自分がブルーウォーターを持たねばならないのか、そして、フェイト達はなぜ死んだのか。ナディアはそのような思いに捕らわれる。沈める寺院を訪れたジャンは、その場所とアトランティス人との関係を考える。しかし、その途中で測的長の姿を見かけたジャンは、測的長の口から、父親の死を告げられる。ジャンとナディアはそれぞれに命の重みについて考え、沈める寺院をあとにするのだった。

ノーチラス号での話　その２

ナディア達は艦内での生活にも慣れてきて、日々それぞれなりに送っている。ジャンは新しい発明をし、ナディアを空に招待する。また南極を訪れたノーチラス号は、資材

の補給を行い、その時ネモ船長はジャンとナディアを彼の親友である鯨のイリオンに会わせる。ブルーウォーターの働きによりイリオンと話したナディアは、近いうちに彼女が父親と兄に再会すると伝えられる。

そして、ガーフィッシュの探索も進んでいる折に、ジャンは自作のロケットの試射に失敗し、ガーゴイルに居場所を知らせてしまう。失敗を責められ、言い返さず黙っているジャンを見て、ナディアは抗議するが取り合ってもらえない。そして、ナディアはエレクトラと風呂でいっしょに話す。その時エレクトラは自分の境遇をナディアに伝える。十三年前、彼女は一人の男にふるさとを滅ぼされ、両親と弟を失ったのであった。その後、そしてエレクトラはネモに対していつまでナディア達をノーチラス号にとどめておくのか詰問するのであった。

第２１回　さよなら・・・ノーチラス号

ガーゴイルの罠にはまってしまったノーチラス号に、ガーフィッシュ艦隊が襲いかかる。しかしノーチラス号は苦もなくこれを撃退してしまう。だが、それすらも彼らの作戦の一環だったのだ。上からなにか来ると読んだネモ船長に対し、ガーゴイルは空中要塞をもって攻撃してきた。発掘されたスーパーキャッチ光線によって空高く引き上げられるノーチラス号。さらに原子振動砲による追い打ちがかけられて、艦体はボロボロになってしまう。下からはガーフィッシュの砲撃、と絶体絶命の状況に追いつめられたノーチラス号。

その時エレクトラは自爆することを提案する。しかしネモ船長は答えない。そんな彼に対して彼女はネモが以前と変わってしまったことを問いつめる。しかし、機関長初め各乗組員はまだあきらめていなかった。バリヤーが破れるようにしむけて一撃必殺の手に全てを賭けるのである。グラタンの協力もあり作戦は成功するが、ノーチラス号は傷ついた船体で碧海深く沈んでゆくのであった。

第２２回　裏切りのエレクトラ

あと一回浮上する空気しか残っていないノーチラス号。ネモは、戦闘区域を切り放して、直上から攻撃を仕掛けてくるガーフィッシュ達を殲滅する。そのあと彼はナディア達を訪れ、彼女らを船長室へ連れてゆく。そして艦橋に戻った彼を待っていたエレクトラは、ネモに発砲した・・・。

ネモに対して自分の過去を話し始めるエレクトラ。彼女はタルテソス王国のクーデターに巻き込まれて弟と両親を亡くしていた。それも、ガーゴイルが使用しようとしたバベルの塔の制御装置であるブルーウォーターをネモが引き抜いたことによる暴走によってである。奇跡的に生き残った彼女はネモに助けられて行動を共にするようになった。娘の代わりでもいいと思い、ネモをしたっていたエレクトラは、しかしある日、ネモのやったことを知ってしまった。それでも彼女は、ネモはガーゴイルに復讐するために生きているのだと納得して彼についていった。だが、ネモはガーゴイルを目の前にして自爆することをしなかった。ナディアがいたから自爆しなかったのかと詰め寄るエレクトラに対してネモは、娘のように思っている君がいたから自爆しなかったのだと答える。ネモ

の想いを知り自殺しようとするエレクトラに対して、ネモは「命を粗末にするな！生きて、自分のすることを考えろ」という。そして、彼は船長室を切り放し、乗組員と共に海中深く沈んでゆくのだった。ナディアに「生きろ！！」という言葉を残して・・・。

その間のストーリー

ノーチラス号と別れたジャンとナディア、そしてマリーとキングの３人と１匹はとある無人島にたどり着き、その日暮らしの生活をはじめた。科学の力で生活の術を編み出すジャンに対し、大自然と共にわがままに生きるナディア。二人はけんかしたりしながらもそれなりにうまくやって行き、ついにファーストキッスを交わすまでに至る。しかし、その生活も台風により崩れさってしまう。その台風で近くに来た大きな島に移動したナディア達を待っていたのはグランディス達３人とエアトンであった。

力を合わせて生活する彼らだが、ある日ジャンはその島の秘密を知る。なんと金属が地面に露出しているところがあるのだ。ナディアと共に島の洞窟には行ったジャンは、そこにノーチラス号そっくりの船をたくさん見る。そしてナディアは島の中の不思議な建物の中に吸い込まれて行く。この島はアトランティス人の遺産であるレッドノアであったのだ。そこでナディアは自分の過去とブルーウォーターの秘密を知る。

レッドノアはアトランティスの王家を再興することを望んでいて、ブルーウォーターもそれを補佐するためにプログラムされていたのだ。王家の再興のための行動をはじめるレッドノア。しかし、ナディアは王家の再興など望まず、ただ自分のふるさとに行きたいだけだと主張する。レッドノアも彼女の意志に押されてブルーウォーターそのようなプログラムをし直す。そして、島は崩壊し、レッドノアは海深く沈んで行く。しかし、レッドノアはその動きを察知したネオアトランティスに追われていく。そしてナディアは自分の故郷を探すためにアフリカへ向かうのであった。

第３５回　ブルーウォーターの秘密

ついに生まれ故郷にたどり着いたナディア。そこにある湖を見たとたんナディアは湖の中を歩き出した。グラタンで追いかけるジャン達の目の前で湖が割れて、彼らは中に落ちてゆくが、ブルーウォーターの力により助かる。湖の底には、不思議な建物があり、彼らはその中を進んでゆく。その中でナディアは自分の過去とアトランティス人の歴史について語りはじめる。

大昔地球にやってきたアトランティス人は、互いに３つの陣営に分かれて争った。宇宙船の一つはアトランティスとして海の底に沈み（第１６回で現れた海中の神殿）、一つは主を失って移動する島となり（島編で現れた移動するレッドノアのこと）、もう一つの船の人々はわずかながら生き残ってタルテソス王国を築いたのである。そして、ナディアはタルテソスの王女であり、宇宙人なのであることを明らかにする。ブルーウォーターの力はこのタルテソス王国では絶対の力として働きなんでもできるのである。

しかしナディアはその力を欲しようとせず、なぜ自分にそんな力があるのかを嘆くが、ジャンやみんなの言葉に彼女は自分を取り戻す。喜ぶ彼らの前にある碑には、ナディアの誕生を祝う言葉があった。それを祝い喜ぶ彼らの前に、突如として現れたのは・・・。

第３６回　万能戦艦ηノーチラス号

彼らの前に現れたのは、ガーゴイルの２隻の空中戦艦であった。ナディアに出てくるようにガーゴイルは要求し、ナディアはそれに従い出ていく。ジャン達はそのあいだに脱出し、突然現れた小型船に助けられる。なんとそれにはエレクトラが乗っていたのだ。エレクトラについて行くジャン達の前に現れたのは、ネモ達が再起を賭ける万能戦艦ηノーチラス号だったのだ。

第一艦橋には、ノーチラス号のメンバーが皆無事にいた。しかし、殲滅爆弾、大型殲滅爆弾で攻撃してくる空中戦艦に対し、ηノーチラス号は沈黙したままである。主機関である縮退炉が動き出すまでは手も足も出ないのだ。ようやく反撃に転じるηノーチラス号。その主砲は空中戦艦の１隻を一撃で破壊してしまう威力である。

ナディアを返せと迫るネモに対しガーゴイルは断る。力に訴えようとするネモにたいし、逆にナディアの安全のためにネモのブルーウォーターを要求する。それを断り、主砲発射を命じるネモ。ボタンにのびるエレクトラの手をジャンの手が押さえる。ジャン、エレクトラ、そしてクルーの説得にネモはブルーウォーターを取り出し、ガーゴイルに取りに来いという。ブルーウォーターを奪い取り、もう用はないとηノーチラス号に重力子爆弾を発射するのだった。

第３７回　ネオ皇帝

海底トンネルを抜けて重力子爆弾の驚異から逃れたηノーチラス号は主機関である縮退炉の調整を手がけていた。ネモから奪ったブルーウォーターと、ナディアのブルーウォーターでレッドノアを起動するネオアトランティス。

ガーゴイルにとらえられたナディアは、ガーゴイルにアトランティス人の歴史を聞く。２４０万年前地球に不時着したアトランティス人は、自らの僕として人間を作り出した。人間は猿から進化したのではなく、アトランティス人によって作られたのである。愚かな人間を指導するためにガーゴイルは再びアトランティスの力を使おうとしているのだ。

ガーゴイルにつれられて、ネオ皇帝に会うナディア。ネオ皇帝もやはりアトランティス人が人類を指導して行くべきだと主張する。反発するナディアだが、ネオが自分の兄であることを告げられ、戸惑う。

パリ上空に到達したレッドノアは全世界に対し宣戦布告して、見せしめのためにバベルの光を発動させる。その威力に驚異する人類。だが冷静にそれを見つめていたのはηノーチラス号の乗員であった。縮退炉のチェックも済み、ネモは乗員を退艦させ一人で出撃することを告げ、皆に礼を言い一人乗り込む。しかし動けるものは皆乗り込みいっしょに戦うことを示す。「皆仲間じゃないか」機関長はいう。

通告を無視した人類に対し、バベルの光を見舞おうとするレッドノア。しかし一瞬早くηノーチラス号の砲撃が、僕の星ミカエルを打ち抜く。そしてついにレッドノアとηノーチラス号は対峙するのであった。

第３８回　宇宙へ・・・

パリ上空で決戦を繰り広げるηノーチラス号とレッドノア。バリヤーで攻撃を防ぐレッドノアに対し、ネモはやはりこちらもバリヤーを展開しレッドノアに突っ込む。ついにバリヤーを打ち破り、グラタンをレッドノア内部に進入させることに成功する。

僕の星ルシファーを使い再びηノーチラス号を攻撃するレッドノア。かろうじて耐えたηノーチラス号だが、もう避ける力は残っていない。二発目がまさに発射されようとするときに、グラタンの働きでバベルの塔は機能を停止する。そしてηノーチラス号の主砲がレッドノアの外壁を突き破り、ついに進入に成功する。

ナディアを助けに行こうとするネモに、ジャンとエレクトラはついて行く。ガーゴイルにより帰還の術を失ったネモ達の前に、ガーゴイルが現れ、神前裁判を開くという。裁判の執行人として現れるネオとナディアだが、ナディアはガーゴイルにより意識を消されていた。人間との共存をはかるネモと、人間を支配しようとするガーゴイル。そして、ナディアは、ネモに銃を向け撃つ。そしてネモはジャンにナディアを撃つようにいい、ジャンはナディアに銃口を向ける。

最終回　星を継ぐもの・・・

ジャンにナディアを撃つことはでず、必死でナディアに意識を取り戻すように訴える。そんな彼を見てガーゴイルは人間の甘さを笑い、ネオとナディアにネモを撃たせ、ネモはその場に倒れ込む。だが、ガーゴイルの脇にηノーチラス号の主砲が炸裂し、ネオの制御装置は破壊され、ネオは意識を取り戻すのであった。ガーゴイルの束縛から逃れることのできたネオはナディアを助けるためにその機械の体を動かしはじめる。

一歩また一歩と進んで行き、ナディアの制御装置を破壊しようとするネオだが、寸前、ガーゴイルに電源を抜かれて動けなくなる。だが、彼の意志の力は動くはずのない体を動かし、ナディアの制御装置を握りつぶす。ネオの意志を受け止めてついにナディアは意識を取り戻す。そしてネオは爆発する。

意識を取り戻したナディアは、ガーゴイルに協力することを拒む。そんなナディアの意志を覆すために、ガーゴイルの手はジャンに伸び、ジャンは殺されてしまう。その時ηノーチラス号が突っ込んできて、主砲を発射する。

ジャンのもとに駆け寄るナディア。しかしジャンは動かない。そんなナディアにネモは自らのブルーウォーターを差し出す。そしてナディアはブルーウォーターに祈り、ジャンを助けてもらおうとする。ブルーウォーターの光の中にナディアは吸い込まれる。その時ガーゴイルが現れて、光の中に手を差し出す。だがその光の中ではアトランティス人しか生きて入れないのだ。体を塩に変えてゆくガーゴイルに、ネモは、アトランティス人はもう自分とナディアしかいないのだと告げる。そして、ガーゴイルは消えた。

そしてジャンはよみがえる。

レッドノアから脱出するために、乗員は小型艇に乗り込んで脱出しようとするが、ネモ船長は乗り組んでこなかった。グランディスとエレクトラ、そしてナディアに言葉を残し、彼はレッドノアと共に爆発して、ノーチラス号を脱出させる。

その船の中で意識を取り戻したジャンは地球を見てナディアにいう。「君の生まれた星だよ、僕らは同じ地球人じゃないか」　(以上　羽田)

不思議の海のナディア主要登場人物紹介

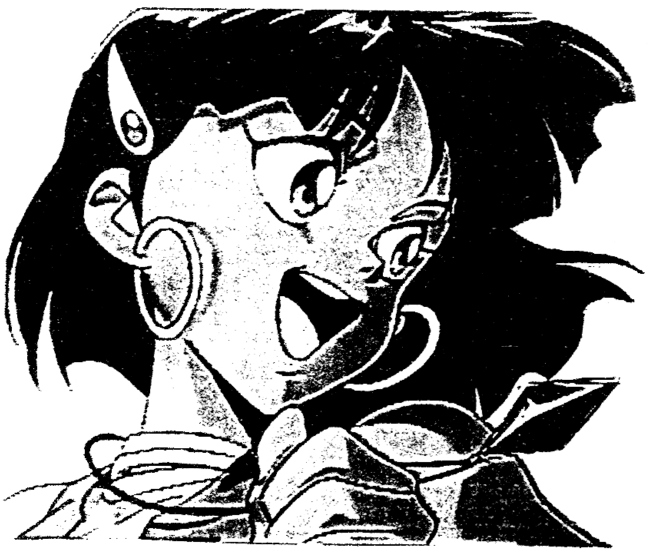
ナディア（鷹森淑乃）：サーカス団に拾われて育てられ、曲芸師となった捨て子。その不幸な生い立ちのためにかなりやさぐれた世の中の見方をしている。ライオンのキングと一緒にいて、動物の話が理解できる（と信じている）ため、徹底的な菜食主義を貫いている（ただし卵は食べる）。自分のふるさとを求めていたのだが、ジャンと知り合ってから冒険の旅へと進んでいく。胸のブルーウォーターは自分の両親を捜すための唯一の手がかりである。ナディアがピンチになると光るのであるが、その実体は謎に包まれている。素直でないために感情の表現が苦手であるが、実際には多感な年頃である。ただ物語中では、かなり性格はきつく、わがまま・強情・意地っぱりといった表現もされる。１４歳。

ジャン（日高のり子）：フランスのル・アーブルに生まれる。父親は船乗りであり、叔父叔母の世話になっている発明好きの少年である。家庭は裕福であり、発明にいそしんでいるが、父親は海の怪獣に襲われて現在行方不明である。パリ万博の飛行大会に参加するためにパリを訪れて、そこでナディアに一目惚れする。非常に純粋な少年で、科学を愛し、一見のんびりとしているようだが、実際は猪突猛進型で、思い立ったら止まらない情熱家でもある。ナディアの故郷をいつか探し出すために飛行機の改良を続けている。１４歳。

マリー（水谷優子）：フランスのマルセイユで生まれる。父親の仕事の関係で大西洋の孤島マハルに移り住み成長する。父親と母親の豊かな愛情に包まれて育ち、自由奔放、天真爛漫で元気な少女である。だが、ガーゴイルの野望に巻き込まれたために両親を亡くしてしまい、ナディアたちと一緒に行動するようになる。その後キングと仲良くなり、ノーチラス号での生活にもすぐに適応する。かなりおてんばなところもありその行動は非常に楽しい。４歳。

キング（桜井敏治）：ナディアとサーカスで一緒に活躍していたライオンの子ども。ナディアを心から慕い、ナディアの唯一の友達としてかわいがられてきた。よく猫と間違われたりするが、かなり勇敢である。マリーともすぐに仲良くなりよく一緒に遊んでいる。ジャンとナディアの関係にヤキモチを焼いたりするなど、人間以上に感受性が鋭く、感情が豊かである。ときに、魚釣りをしたり、雨ごいをしたりと、大変にユニークなライオンである。

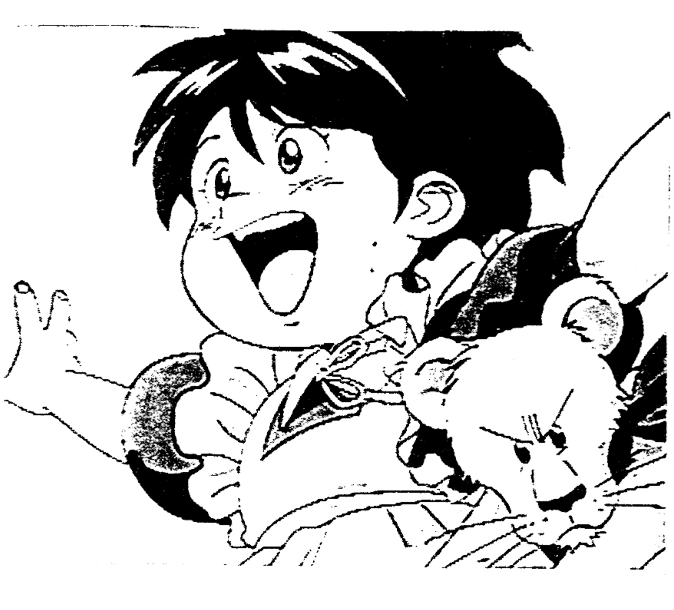
グランディス（滝沢久美子）：イタリアの名門の出身であり、裕福に育つ。しかしある男にだまされて全財産を失ってしまい、それ以後は宝石と愛のために生きるようになってしまった。サンソンとハンソンををつれて行動している。中年の渋い男性によく一目惚れするが、飽きやすい性格のためかいつも実らずに終わる。ネオアトランティスの広



ナディア



ジャン



マリー　キング



グランディス

ハンソン　サンソン

告によりブルーウォーターの存在を知り、それを手にいれることを当面の目標にしていたのであるが、ノーチラス号に乗り込んだときに会ったネモ船長に一目惚れして、ノーチラス号でやっかいになることになる。エレクトラとの恋の争いは大変おもしろい。２８歳。

サンソン（堀内賢雄）：グランディスと一緒に行動する色男。犯罪と貧困の町に育って、元々はグランディスの家に雇われていたのだが、没落した後も「姐さん」とグランディスのことを慕ってついていっている。凄腕のガンマンであり、優秀なグラタンのドライバーでもあるが、ハンドルを握ると性格が豹変する。ダンディに振る舞っていて、いつもクールに決めていて冷静な判断と分析を行うが、実際は猪突猛進型である。その姿に似合わず怪力の持ち主であるのだが、根は心優しい紳士である。マリーのことを大変かわいがっている。物語の最後では・・・。２７歳。

ハンソン（桜井敏治）：やはりグランディスと一緒に行動する技師。ノーベル賞級の頭脳を持ち、グラタンを発明する。グラタンではサンソンのナビゲーターも務める。好奇心探求心にあふれ、幅広い分野における知識を誇っている。やや小心なところもあり、よく愚痴をこぼしているが、ここ一番のときの判断は鋭く、決断力にあふれている。ジャンと一緒にいろいろな発明をして活躍する。またエレクトラさんにほのかな恋心を抱いているようだが、行動には移せないようだ。２７歳。

ネモ船長（大塚明夫）：ノーチラス号の艦長（船長と呼べ！）であり、かつてはタルテソス王国の王であった。自らの過ちから多くの国民を死なせてしまったことに深い悲しみと責任を感じ、ガーゴイルの野望を阻止するためにノーチラス号を発掘した。いつも冷静な指揮をとり、乗組員の信頼も厚く、私情を挟まずに行動している。しかしナディアと出会ったことにより彼の行動はこれまでと変わってくる。彼とナディア、そしてガーゴイルとの関わりは物語の大きな位置を占めている。

エレクトラさん（井上喜久子さま）：ノーチラス号の副長としてネモ船長と行動をともにしている。いつも沈着冷静であり副官としても有能である。ネモ船長を父親のように慕っているのであるが、その言動には棘も多い。ネモ船長に対しては複雑な感情を持っているのだが、ナディアたちと行動をともにしてからその傾向はさらに深まった。自称四捨五入すれば２０歳。（ちなみに筆者はエレクトラさんと天道かすみさんのために井上喜久子さまの大ファンになりました）

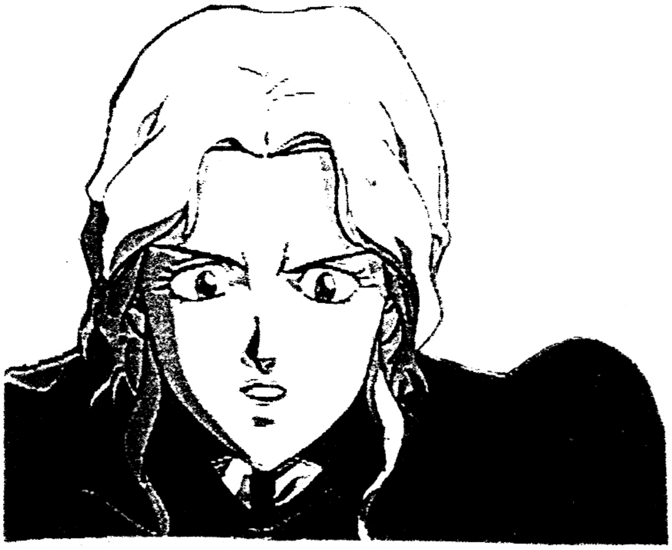
ガーゴイル（清川元夢）：悪の組織ネオアトランティスの総帥。ネモとは古い友人である。自らを選ばれた神であると信じ、堕落している人間を自らの手で指導するためにアトランティスの力を使うことを決意する。タルテソス王国でクーデターを起こして政権を掌握、以後全世界を股に掛けて活動している。冷徹で文字どおり人を人と思わない行動をとる。ネモとナディアのブルーウォーターをねらっている。



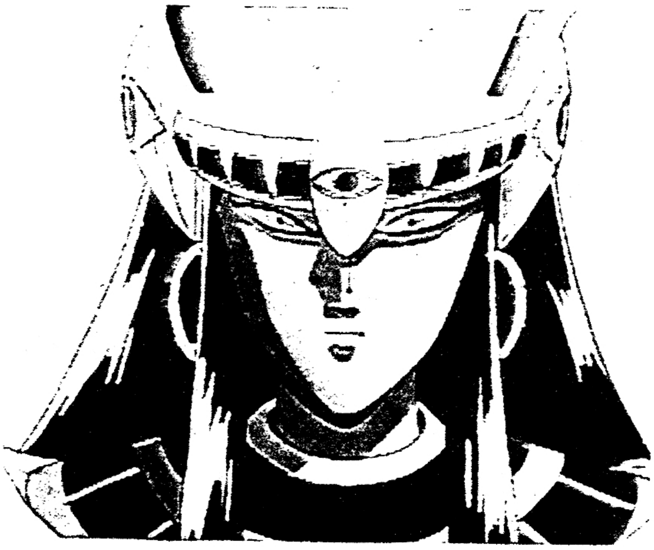
ネモ



ガーゴイル



エレクトラ



ネオ

ふしぎの海のナディアより

エレクトラの残像

片岡　徹也

私にとって本作品で最も印象に残っているのはエレクトラの描かれ方である。第２２話「裏切りのエレクトラ」において、嫉妬心から生じた憎しみと哀しい愛情の葛藤が表現された。彼女がネモに銃を向けるという行動である。エレクトラの狂おしい心情を赤裸々に描いた当話の作品づくりは、人間内面の画面表現という点で評価している。

ところでキャラクターの心情変化を描くということはある程度の時間推移が必要だと思う。つまり一般的に言ってあるキャラクターが視聴者に受け入れられるには最低でも１クールくらいの期間がかかるように思う。しかしエレクトラがネモに銃を向けるに至った経緯の説明は全て２２話でなされている。

なぜ３０分という短い時間で、エレクトラの心情を視聴者に訴えることができたのか。このことについて少し考えてみたい。まず２２話がどういう状況にあったのかをそれ以前の展開から洗い出してみる。

［１］ストーリーの展開状況

２１話においてノーチラス号はガーゴイルの空中要塞の攻撃を受け、スーパーキャッチ光線によって宙吊りの状態にされてしまう。身動きのとれないノーチラス号は総攻撃を受け、今にも破壊されようとしている。

［２］主人公ナディア達の状態

ナディアやジャンはノーチラス号に乗艦することになっている。しかし艦長のネモや副官のエレクトラを初めとする乗組員の過去を知らなかった。また彼らが、ガーゴイルを倒すという目的を持っていることは分かるが、その理由も知らずにいた。従って乗組員、特にネモとエレクトラに関する情報は求められていた。

［３］ネモに関する情報

ガーゴイル打倒に燃える冷徹な男とされており、表面上ナディアに対し無関心な様子であったが、ナディアが病気になったときはガーゴイル軍の追跡よりも彼女の治療を優先させるなど、従来の行動原理に反する態度を見せていた。

［４］エレクトラに関する情報

ネモの忠実な副官であり、ナディア達にも相応の対応をしていた。ただナディアが病気の時に、ガーゴイルの追跡をあきらめたネモに強く抗議するなど、あくまでガーゴイル打倒を優先する態度を示した。

［５］廃墟となった海底都市

１６話で廃墟となった海底都市を訪れ、幾多の墓標の前でノーチラス号の乗組員が哀悼の意を表するという場面があった。しかしそこがどういう場所なのかという説明もなく、葬られている人々についても分からない。

以上の５項目が２２話を考える上で重要な要素だと考える。２２話はこれらの設定を受けて、作品作りがなされている。２２話の展開に要求されていたのは次の３点であろう。①ノーチラス号がガーゴイルの手から脱出すること。②ノーチラス乗組員達の過去

と行動目的を明らかにすること。③廃墟となった海底都市の説明。当話は前半で①のノーチラス号の脱出を描き、後半では②と③についてをエレクトラの回想という形で視聴者に示している。また銃を向けるというエレクトラの行動の前兆として、ネモにおける行動の変化やそれに対するエレクトラの反発があらかじめ述べられており、雲行きの怪しさを感じなくもなかった。

　こうしてみると22話の面白さとして以下の3点が挙げられるのではなかろうか。まず一番目として視聴者にノーチラス撃沈の危機をいかに脱するかという期待感があり、それを描いたこと。二番目にエレクトラの心情描写を行う際に回想という形でネモやエレクトラの故郷のことやそこに起きた惨劇について明かしたこと。三番目に愛憎の葛藤に苛まれるエレクトラの哀しい胸中が見るものに感銘を与えたこと。この出来事は当話において突発的なものではない。

　「娘として愛されているだけで良かったのに、どうして私の愛した男のままでいてくれなかったの？」ネモに銃を向けながら叫ぶエレクトラの描写が心迫るものであったのは事実だと思うのだが、これに加えてノーチラス号の危機により雰囲気を盛り上げ、また視聴者が求めていた背景設定を示したことも見逃してはならないだろう。この二つの要素に支えられることでエレクトラのキャラクター描写はより一層効果的なものとなり、視聴者に印象を与えたのだと私は考えている。

　当作においてエレクトラの話題は主人公ナディアの心境や行動の変化、物語の展開に結びついていなかった。また彼女のエピソードは作品全体のイメージ作りに貢献しておらず、結局はサブエピソードに過ぎなかった。それでも私がふしぎの海のナディアという作品を思い浮かべるとき、真っ先に思いつくのはエレクトラのキャラクター像である。それは全て22話の印象によっていると思う。心の葛藤に苦しんだエレクトラの生き様新居までもたまらなく惹かれている。

岡田斗司夫氏のインタビュー

岡田斗司夫：大阪出身。大学在学中にゼネプロを結成し、ＳＦ大会でダイコン３を発表。その後GAINAXの社長として、アニメ特撮を中心に手がける。主に脚本とプロデューサーという役割を担う。現在は東京大学講師、御茶ノ水美術専門学校顧問、プロデューサーとして活躍中。主な作品は「トップをねらえ」の脚本、「愛国戦隊大日本」の脚本など。

九月某日、我々東大アニメーション研究会の面々は岡田斗司夫氏へのインタビューを決行した。その内容をできるだけその場の雰囲気に忠実に、しかも読みやすいように編集して以下に記す。

午後１時吉祥寺の喫茶店ルノアールにアニメーション研究会の羽田と深堀と日下部と秋葉が集まり、程なくして岡田斗司夫さんも登場した。簡単な挨拶の後さっそくインタビューが始まった。（以下岡田斗司夫氏は岡、聞き手は聞）

パロディとはいったい何であろうか？

聞「幾つか質問を用意してきたのですが、いきなりトップをねらえからはじめさせてもらいます」

岡「はいはい」

聞「この前お会いしたときにトップのことについてオリジナルの要素を全く含めなかったとおっしゃってましたが、そのことについてもう少し詳しくお願いします」

岡「わかりました。ご存じのように私どもの活動はダイコン３・４といったパロディから始まっておりまして、そのことに関してアニメ界の立派な方々との戦いがあったわけですね」

一同「立派な方々ですか、（笑）」

岡「夜中に人の会社にいきなりやってきて勝手に説教する宮崎駿さんとか、後、天使のたまごという作品でオネアミスの翼を作っている最中にスタッフを引き抜いていこうとする押井守さんとかですね、そう言うアニメ界の立派な方々がいらっしゃるわけで、そういう方々が君たちもパロディばっかりじゃいかん、オリジナルを作れとさんざん言うわけですよ」

聞「あ、雑誌で読んだことあります」

岡「そうすると、宮崎さんの作品を見ていると文句を言いたくなるわけですよ、じゃあ君の奴は藪睨みの暴君のパロディじゃあないのかとか、押井さんあなたのはてっきりタルコフスキーのパロディだとてっきり思っていたんですけど気のせいですか、とか」

聞「ロシア映画でしたっけ」

岡「そう。で、そういうわけでクリエーターの持つオリジナリティといったものに嫌気がさしていたんですよ。で、デビュー作の王立宇宙軍が大変オリジナル色が強かったものでしてよけいに、彼らはもう大人になったんでパロディをやめてオリジナルになっ

たんだろうと思われたという大変いやな経緯がありましてですね。しかしちょっと待ってくれ、聖書からこっち世の中にはオリジナルなんてものは存在してなくて、この世には48のシナリオバリエーションしか存在していないんだとシナリオやってるときに習ったんですよね。その辺はシェークスピアとかその辺が発見した法則らしくて、その中には神と人間との葛藤のように日本人にはどうしても使えないのが2つあるんで、日本では46しかシナリオがないんですよ。で、うん、物語の中身そのものもどっかで聞いたことのある奴にしたかったし、表現としての絵とかアニメーション自身、そして小道具のたぐいも見たことがあるようなやつで構築していって、全編見たことのあるやつで構成してやろうという、意地が半分。後それにみんなが喜んでしまったというのがありましてトップをねらえという作品ができたわけであります」

一同「なるほど・・」

岡「で、そのときは意識してなかったんだけど、後で現代芸術やってる人と対談したときに、それはサンプリングとかノイズの手法だといわれまして、はたと気がついてですね、5分くらい映画をつなげてそういうことをやった奴はいるけれども、30分のアニメでそれをやって、6本も売ってしまった奴はいないということでして、そうか俺たちは現代芸術としても結構いいところまでいってたんだなと思ったわけです」

聞「それで次の質問なんですけれども、たとえばトップを見ていたりするときに、知らないはずのことをこれはパロディだろうと受け取ったり、元ネタを知らないのに笑えるといったことがありますよね、これはどういうことだと思いますか」

岡「たとえば特有の英語表現が映画の中で出てきたとしますね、例をあげますと、映画の中で一方通行の道を逆走する車に、このニュージャージー、と運転手が怒鳴りつけるわけです。そのときはなんだかわからなかったんですが、後でニュージャージーはアメリカの中で一番免許のとりやすい州で前進とバックとウィンカーが出せれば免許とれるんです。そういうことを発見したときに気持ちよかったんです。だから映画を見ていてわからなかったことは、宿題を一つもらったという感じがするわけです。そうして発見する喜びがあるわけですね。そうすることを日本で作りながらも作品の中で成功させようとしたのがトップをねらえのパロディの無数の原点となるんです。ふつうに日本映画を見ていると独特な言い回しとかはお互いにわかっているという前提のもとに作られているので外国映画を見ているときみたいにわからないことはないんですね。つまりトップを楽しめるのは原点探しをできるところにあるのだろうと思うわけです、と思ったからそういう風にやりました」

聞「ではそういう風なわけで受けてるわけですか」

岡「いやでも見ている人の8割までが頭悪いから、という前提のもとに作ってますんで、いやそういうのが考え方の基本なんですが・・・。それは東大生の8割が頭悪いからといってもいいし、どう言ってもいいんですが、あのう、見ている人の8割はそんなこと考えて見ているとは思いませんよ、多分見てみたらビジネスじゃなくって友達みたいな奴が作っているみたいだからとか、単純におれこの原点知ってるぜと思ってみたり、というふうなおたくよろこびであるかもしれないし、絵がきれいだからかもしれませんし・・・。ああ、そうそうトップを作るとき、1万円の商品とはどういうものだろうか

と思って作ってみたわけです。他のジャンルの商品と比べてどうかと考えたときに、３回見た上でまだ２割くらいわからないところがあれば見た人は損した気にはならないだろうと思ったわけです。内容のバランスはそこから決めたんです」

オネアミスの翼とパロディ

聞「ところで、オネアミスの翼を作ろうとしたきっかけは何でしょうか」

岡「あれは当初、ダイコン４オープニングアニメというのがありまして、１５分で１６ミリの予定だったんですが、あの話で当初やろうとしていた物がオネアミスなんですよ。しかしスケジュール的にどうしても間に合わなくなって、ミュージックビデオだね、ということになって、そのときの１５分の物を３０分のアニメにしてセリフもつけようということにしたら、２時間で劇場でできるということになったので、やったんです」

聞「でもあれはパロディとは違うように思えますが」

岡「しかしオネアミスの翼は現実のパロディと捉えるものだし、単純にパロディといえばアニパロという感じがあるだけなんですよ。そういう点でいえばトップもナディアもオネアミスもダイコンも同じくらいテーマ性が強いんですね。何でダイコンに女の子が出てきてあんなに力が強くてということは言うなれば僕らの宣戦布告みたいなもので、これまで子どもだった私たちのグループでもいろいろできるぞということをいうために女の子が敵をなぎ倒して行くわけです。しかし世の中でそういうテーマを読みとる人はそんなに多くなくて、シリアスな場面でセリフで説明すればテーマだと思いこんでいる人が多すぎるんですよ。たとえばダイコン４のテーマに気づいた人はいないけど、パトレイバーだったらみんな考えますよね。そういうことなんです」

トップをねらえの裏話

聞「ちょっと変わりますけど、ノリコのおたく的な部分はどうして少なくなってしまったんですか。もっとコスプレさせたりしたかったようですが」

岡「そのですね、もうあれは本編でやってる暇なんか無かったわけです。たとえば本来なら五話と六話の間にあと一分あればできたことはですね、原画までできていたんですが、世界の大統領であって日本の首相である人の演説がはいる予定だったんです。その演説は、とにかく宇宙怪獣の根本を断つために、娯楽などをやめて銀河の中心に向かってなぐり込みをかけねばならない。銀河なぐり込み艦隊はスレイブという重力爆発を起こすための事象の地平線みたいな機雷を敷設するために銀河系をぐるりと回ったあと、そのあいだに地球で作っているバスターマシーン参号を完成させよう、と言うことなんです。そのためには前の重力震によって生じた被害を治すこともせず、もう科学の進歩は一歩もなくなってしまうわけですが、この資源と予算を全てそのために費やすわけで、緊縮財政になる、という演説を切らねばならなかったわけですね。もうこれを切るとなるとノリ子のコスプレなんてことはやってられないんです」

一同苦笑する。

岡「だからもうマキプロにも出さないで写植を自分たちで何とかしてマキプロさんに

もお金をいくらかまけてもらったわけです。そういうわけでものすごくぎりぎりでことをおこなってたわけで、結構ストレスもたまりました。だからあとでバンダイにＬＤボックスで完全版にして出さないかと言われたときにはふざけんなと言いたくなりましたね。そんなの３０秒ばか付け足したってしょうがないだろうって」

聞「それにしても一話は思いっきりエースをねらえですよね」

岡「一話はアフレコ大変でしたよ、とにかく日高のり子さんが、『お姉さまが鉄下駄を・・』、が言えないんですよ」

一同「ええっ！！（笑）」

岡「全然言えない、プロの声優がどんなに頑張っても言えないって言うのはまず無いですよ。どんなにおかしいコメディでも三回四回とアフレコしていると笑わずにできるようになるもんなんですがねえ・・・」

ナディア制作秘話

聞「ところで話は変わりますけど、不思議の海のナディアはもともと南の島のフローネを目指していたという話を聞きましたが、あと・・・」

岡「いや、宮崎駿様原作の８０日間海底世界一周だったんですよ」

聞「そう、調べていたらもともと宮崎さんの原作だったということですが本当ですか、という話だったんですが、詳しく教えていただけませんか」

岡「結局ですね、最初ＮＨＫから企画がでてくるわけですが、その内容がお婆さんがいて、二人の息子がいて、『あの首から下げているブルーウォーターが欲しい～』とか言うセリフがあって、これいいの？（笑）ＮＨＫでそんなひどいのやっていいのか、何でやるんだか全然わかんなかったんですよ。黒人の女の子がいて、男の子がその子に惹かれて、胸の宝石が光って、女の子が空飛んだりして・・・まるまるラピュタじゃないか。こんなのやっていいのってＮＨＫに聞いてみたら、ＮＨＫのもう70すぎたプロデューサーが泡吹いて怒りだして、その人入院しちゃったんですね。何か変だと思ってたら東宝の人に呼ばれて、机の中から見せられたのが、宮崎さん原作の８０日間海底世界一周だったんです。それを宮崎さんが書いたのがもう１５年前だったんですね。これをＮＨＫの人が見つけてそのままやろうとしたんだけど、もうそこに書いてあることは宮崎さん自身がラピュタでもう全部やってしまっているんですね。だから今更と思っても、ＮＨＫの人はラピュタを見ていないから知らないし、だからといってＮＨＫにそんなこと言えないんですよ、偉いから（笑）。で、ＮＨＫと取引できなくなってもこわくないからって俺が言ったらそうなったんです。そこでＮＨＫと掛け合って、お婆さんと息子でなくて、ドロンジョとトンズラーとボヤッキーにしよう、首の宝石が光るのはいいけど空飛ぶのは勘弁してくれ（笑）、不思議なテレパシーで動物と会話できるという設定は、不思議なテレパシーでもいいから、会話できると自分で思いこんでる女の子という設定になったんです（笑）」

聞「どんどんナディアが崩れていってしまいますね。島編のナディアはこうしてできたんですか・・・」

岡「大変おもしろくなりましたが、評判悪い悪い」

聞「上映会ではたぶん放映しませんよ」
岡「そのときはそういう感じで、貞本が監督していたんですが、彼はまじめだから何かこういうのには我慢ができなくなって、爆発しちゃって、僕は生涯絵描きをやります、監督も演出もやりませ〜ん、と逃げたわけですね。そうすると向こうから庵野が笑ってやってきて、岡田さん岡田さん、僕は監督ができます、ってね」

庵野監督とナディアとエヴァンゲリオンとジャイアントロボ

岡「で、庵野が、俺はアニパロだけではありませんよって（笑）」
聞「で、宇宙空母ブルーノアとの関係はどうなんですか？」
岡「あ、だから、庵野はオリジナルができない体質なんですよ。どっかから持ってくるしかできないんですよ。エヴァンゲリオンをしばらく見たらわかるから」
聞「え、そうなんですか」
岡「まず人間関係はガンダムで、頭にでている角はファイブスター物語で・・・」
聞「はっはっはっ、オリジナルをやるんじゃなかったんですか」
岡「ダメ、体質的にできないから」
聞「で、庵野監督になって、どうなったんですか」
岡「まあ、ＮＨＫはいやがって」
聞「ＮＨＫはいやがったんですか」
岡「そりゃ、トップ見たらいやがるよ」
一同（笑）
岡「ただオンエアが４カ月後だったからどうしようもない（笑）」
一同「どうしようもない（笑）」
聞「この前聞いたとき岡田さんはぎりぎりまでタッチしてなかったとのことですが」
岡「そうそうそうそう。それはね、王立終わってトップ終わったあとで、貞本くんと、当時副社長の井上さんという方が、GAINAXから独立するためにとった作品というのがナディアな訳です。だから社内で半分くらいの人が知らなくて僕も知らなかったんだけど、そのうちにどうしても動かなくなってしまったんだね、企画が。ＮＨＫのプロデューサーの言ってることがあまりにも無茶苦茶だったし、あと貞本くんの方が不安になって、これGAINAXで受けるのならともかく新会社作って大丈夫だろうか、というわけで、ある朝、会社に行ったら、実はこれこれという・・・。そのときにはメインキャラとかはほとんどできあがってたんだけど、ストーリーの方はほとんどできてなくて、で、ストーリーの方はＮＨＫのシナリオライターが書くというのでまかせていたんだけど、ＮＨＫから来るシナリオはもうどうしようもない使い物にならないものなんですね。で、人間関係はさっき言ったようにラピュタだし、設定もまるまるラピュタだし、これはまずくないかということで、ＮＨＫと話したら、そのときＮＨＫは私が社長と言うことに気づいたんですね（笑）。ということで一から話が始まったんです」
聞「よくでき上がりましたね、その状態で」
岡「まあ、トップもそうだったし、でもトップは庵野が知らなかったと言うよりも、シナリオまでGAINAXでやって、作画から演出までは全部外に出すつもりだったんだね。

ヘッドギアとパトレイバーみたいなもんです。しかしあんなすごい作品は引き取り手がないし、ここまですごいと自分たちでやりたいというのが明らかになってきたところで、庵野がトコトコとやってきて、シナリオ見せて下さいと言って、見た所、ぽろぽろと泣き出して、やります、と。で、いまだにあの作品を庵野監督だと言うと、え、あれは樋口の真ちゃんがコンテ書いてるから樋口真嗣監督作品じゃないの（笑）ってことになるんですよ」

聞「あとナディアについてはスケジュール的にもだいぶきつかったようですが・・・」

岡「いや、ナディアの時には湾岸戦争のおかげで制作もだいぶ助かりましたよ。実はナディアはもともと二十六話分しかない話だったんですよね。残りの十三話分はもうどうしようもなくってですね、島編だったり、ノーチラス号の関係ない話だったりするわけです。だからもともとスケジュールの関係から十三話分は捨てなければならないんですね。ところがそういう回に限って樋口くんが絵コンテやってるから妙に質が高いんだよね。あの島編の新発明ばっかりする回も捨てたはずなのに無茶苦茶楽しかったですからね」

聞「けっこう寂しいものがありますね」

岡「ジャイアントロボについてだけど、庵野は参加してて焦っちゃったんだよね。つまりジャイアントロボの持つテーマ性とかストーリー上の暗澹たるイメージを本気にしちゃったんだよね。どうも庵野は何も作らず他人の作ったものをうまく処理する方が向いてるみたいなんだよね。ついでに押井守も同じだね。だからオリジナルでやると天使のたまごと言った風な訳の分からないものになっちゃうから、ビューティフルドリーマーのようなものがいいんだよね。また庵野に戻るけど、つまり設定を重くして、戦う相手を意味不明にしとけば庵野監督はこれ以上考えなくていいからいい物ができるだろう、と言うことで、なにかしようと言うことで、膨大な世界観を赤井孝美さんと作り、脚本岡田斗司夫氏、監督庵野秀明氏、プロデューサー赤井孝美氏ということで作品の概型はできあがっていて、これがエヴァンゲリオンなんだよね。いつのまにか流れた企画だと思ってたら去年あたりから急浮上して同じ設定で始まっちゃったんだよね。まあ庵野を看板にしたんだな」

聞「じゃあ庵野監督はタッチしてないんですか」

岡「いや、脚本書いてる人は別にいて、それを庵野がセリフだけなおすんです。少女マンガからセリフを持ってきて、それはもうホントにうまい。人によって原作との関わりは違うからアニメもホントに一概には言えないの」

アニメに対する悪意ある見方

岡「ところで皆さんはアニメを見るときに悪意ある見方をしていますか」

聞「といいますと」

岡「たとえばアニメ見て、うわー頭の悪いセリフ、シナリオ書いたの誰、何でこんなに頭が悪いんだー、と思いませんか。たとえばナディアでもネモがガーゴイルにおまえは人間なんだよ、と一言いえばすんだ話じゃないですか。クライマックスでどうしても話を納めなくてはならないからですね、広げてしまった風呂敷をたたむために、ああ、

ガーゴイルもまた人間だったのか、なんて悲しい結末なんだ、と感動を起こそうとしたんだけど、引いた目で見れば、おい庵野、そんな事するのはNHKで自分が頭悪いことを公表しているようなものだぞ、と言いたくなるわけですね。ジャイアントロボもそうですよ。あんまりアニメ雑誌もこういう事は書きませんよね」

聞「ファンロードくらいですか」

岡「そう、そのくらいだね」

聞「でも、そんなこと気にしますか」

岡「いやーやっぱり、気にしちゃうなー」

聞「でもあら探しくらいはするかもしれません」

岡「そういうとき犯人探そうとしない？」

聞「いや、そこまでは」

岡「たとえばジャイアントロボでは、この山木というプロデューサーが一番ばかだな、とか。あとジャイアントロボはごまかしかたがいつも姑息で楽しいんだ。そういうセリフで言うな言うなと思っていると、ワルシャワ交響楽団の音が大きくなってくるんだ」

聞「確かに音でごまかしてますね」

岡「やっぱりアニメを見るときには批評しながら、批判じゃなくて批評ね、見るのがいいですよ」

このようにインタビューは非常に和やかな感じで行われた。このほかにも現在のアニメ制作の裏話とか、アニメ制作の費用の話だとか、ゲームの話だとかいろいろあって、最後はお開き。

全体を通じて感じたことだけれども、岡田さんはパロディや作品と言ったことを非常に面白くとらえているなと思いました。いろいろな裏話などを聞いたけどそういう物事の捉え方がまた独特で、こういう個性的なところからトップなどのような作品が生まれてきているのだなあと改めて感じてしまいました。

１９８２　おたくのビデオ　あらすじ

テニスサークルに所属し、彼女もいるというごくふつうの青年・久保はある日、高校の時の同級生・田中と再会する。この事が彼の人生を変えることとなる。田中はおたくなよろずサークルのメンバーの一員であった。平凡な学生生活に物足りなさを感じていた久保は、テニスサークルを辞めてしまい、田中の家を訪れることとなる。田中は久保をメンバーの溜り場へつれていく。やたらと濃いメンバーに次第に感化され、深みにはまっていく久保。ついには無精髭を生やし、アニメキャラのＴシャツを着て彼女とのデートに行く始末。さらにその場で「今日何日？・・・しまった。アニメージュもう出てんじゃん」とか言い出すようになってしまったのだから、彼女が久保を嫌いになるのも当然かもしれない。このころから久保の彼女・上野美子は久保との付き合いを考え直すようになる。

その後しばらくの間、田中達と行動を共にし、彼なりの充実した生活を送っていたため、久保はすっかり上野のことを忘れてしまっていた。しかし、些細なきっかけで彼女のことを思いだし、上野の家に電話をすることになる。ところが受話器から聞こえてきたのは聞いたことのない男の声。どうやら上野の新しい彼氏のようである。茫然とする久保。

おたくとなったが故に上野にふられた久保は、田中と会い、「テニスやってるやつが良くて、アニメやってるやつはダメなのか？・・・どうせおたく族って差別されるんなら、とことんおたくになってやるのさ！」といい、就職をあきらめ、おたくの中のおたく・おたキングを二人で目指すことを決意するのであった。

１９８５　続・おたくのビデオ　あらすじ

１９８５年。おたキングを目指す二人が選んだ手段はガレージキットであった。しかも久保は普通のやり方ではなく、会社を作り、版権を買い、合法的にやることを発案。田中もそれに同意する。社名はグランプリ（略称Ｇ・Ｐ）に決めた。最初は通販のみを扱う小さな会社であったが、どんどん成長していき、同年５月２２日には直営店をオープンし、新たな仲間・福原美鈴も加わった。そして１９８７年には巨大な会社に成長するのであった。

そこで専務取締役となった田中は、代表取締役となった久保におたキングを名乗ることを勧める。だが久保は、おたくのための楽園・おたくランドを作ってはじめておたキングを名乗れるという。そのころ会社はいくつかの危機に直面し、伸び悩んでいた。一つは自社版権のオリジナルキャラクターの不在である。この問題は田中に任せ、自らは安く豊富な労働力のある中国に工場を建設するため、単身中国へ乗り込む久保。中国工場建設はＧ・Ｐが更に大きくなるためには必要不可欠だったのだ。

Ｇ・Ｐ中国工場建設も無難に進み、オリジナルキャラクター・メルヘンドールマキも福原によりデザインが完成と順調に進んでいた。そしてついに中国工場が完成したが、その祝宴の席で久保は日本に呼び戻される。緊急取締役会が開かれるというのだ。そこで久保が見たのは、既に東西銀行の神田常務により懐柔させられていた重役達であった。

久保はその場で解任され、次期社長には神田の妻・美子が任命される。彼女こそ、久保を振った上野美子であった。久保は吉祥寺店へ左遷される。久保はこれを機会にこの世界からいったんは足を洗うのであった。

普通の社会人として会社に出勤する途中、G・P吉祥寺店の前にできていた行列の中に変わり果てた姿の田中を発見する。久保を見てとっさに逃げ出す田中。久保は田中を捕まえ、問いつめる。神田によってだまされていたことを謝り、自分も神田にはめられたことを告白する田中。そんな田中を久保は許し、二人でまた一からスタートすることを決意する。

田中は今度は自主制作ビデオを作ることを提案する。絵が描けないことを心配する久保に、田中はそんな心配はいらないという。実は田中はG・Pを退職してからも、福原と密かにコンタクトをとっていたのだった。強力な仲間と再会し、やる気になる久保。今度の会社名はジャイアントエックス（略称G・X）に決定する。自主制作ビデオで再び急成長するG・X。１９９７年にはG・Pを買収するほど巨大になる。

１９９４年4月1日。久保は夢であった東京オタクランドをオープンさせる。その時久保は自分がおたキングになったことを宣言するのであった。

おたくのビデオ主要登場人物紹介

久保（声・辻谷耕史）

ごく普通の大学生だったはずが、田中と再会したことによりおたくとなっていく。上野にふられたことをきっかけにおたくの中のおたく「おたキング」を目指す。その第一歩としてガレージキット会社・G・Pを設立する。けっこう根に持つタイプ。

田中（声・桜井敏治）

久保の高校の時の同級生。外見からしておたくであり、自称・アニメ関係のスペシャリスト。久保をその道に引き込み、久保と共に「おたキング」を目指すこととなる。

上野美子（声・井上喜久子）

久保の高校からの彼女。今は女子大生。急激におたく化していく久保にあきれ、他の男とつきあい出す。美人。

佐藤由香（声・天野由梨）

田中のサークル仲間。田中によると、天才イラストレーターということだが、ストーリー中ではその能力はほとんど見られない。コスプレ大好き少女。よく久保とペアでコスプレをしたがる。

福原美鈴（声・小林優子）

販売員としてG・Pに入社。その可憐な外見からは想像できないが、イラストレーター（アニメーター？）としての才能を秘めている。その才能を発揮し久保を助けることとなる。（続・おたくのビデオのみ登場）　　（以上　文責　大喜）

オネアミスの翼王立宇宙軍あらすじ

まだ人類の領域が陸と海、そして空に限られた世界。その一王国に宇宙軍はあった。宇宙船の打ち上げを任務とし、決して戦わない軍隊。その一士官であった青年、シロッグは、周囲と同様無気力な毎日を送っていた。そんなある日シロッグは夜の歓楽街で布教活動をする女性、リイクニと出会う。彼女に誉められ、有頂天になったシロッグは宇宙船のパイロットに志願し、人類初の宇宙飛行に成功する。という物語である。

この作品は筋に関係ない描写の積み重ねによって雰囲気を作り出しており、筋だけでは全く意味をなさない。一見サクセスストーリーに見える本作の、奇妙な空白感、空虚感を味わっていただきたい。

登場人物紹介

シロッグ（森本レオ）：本編の主人公。幼い頃夢見ていた水軍のパイロットになれず宇宙軍に入り、くすぶっていた青年。夢を見失い、ただ何となく毎日を過ごしていたが、リイクニと出会い、彼女を喜ばせるために宇宙船のパイロットに志願する。

リイクニ（弥生みつき）：本編の一応のヒロイン。ある宗教の熱心な信者で、布教活動を続けている。郊外の家にマナと二人暮らしをしていた。

マナ（村田彩）：リイクニと共にすむ失語気味の少女。自閉症気味でもあり、ほとんど他人に心を開かない。

マティ（曽我部和恭）：シロッグの親友である宇宙軍の士官の一人。ニヒルで格好良い色男。

将軍（内田稔）：シロッグらの直属の上司。宇宙軍総司令官として宇宙船の開発に全力を傾けている。かつては歴史学者を志した故か、含蓄のある発言も多い。

グォノム博士（大塚周夫）：宇宙船開発にたずさわる技術者達の中心的存在。シロッグら青年士官から最も信頼されていた。が、ロケットエンジンの燃焼実験中の事故により死亡。

GAINAX音楽紹介

・オネアミスの翼

音楽プロデューサー	：坂本龍一	「戦場のメリークリスマス」「子猫物語」
コンポーザー／アレンジャー	：上野耕路	「子猫物語」
	野見祐二	「子猫物語」「耳をすませば」
	窪田春男	『未来波野郎』

オネアミスの音楽を解説するに当たって、まず「オネアミスの世界」について説明しなくてはならない。

オネアミスの世界は地球における過去、現在、未来のいずれかを舞台としたものではない。全くのオリジナルな世界なのであるが、空想の世界と呼ぶのは失礼なくらい、強烈な実在感を放っている。それは、政治、宗教、文化の３つを自然に、矛盾なく説明することに成功しているからなのである。

たとえば文化。地球の物と似ているんだが、ちょっと違う、といったファッション、乗り物、遊戯、日用品などを機能性を損なわないように注意して描いている。そこでは、地球の物が描かれたときよりも存在感が強くでている。（これらはコンテを作る前に、オネアミス国の建物や乗り物の模型づくりをしたという、スタッフの努力によるものだろう。）

で、このような世界づくりがかっちりできあがったあとに音楽制作が依頼された。音楽制作スタッフにかかったプレッシャーは大きかったと思われる。安易に（シーンの）説明的な音楽をつけることはせっかく作り上げた独自の世界のイメージを壊してしまうことになるからだ。しかし、音楽制作スタッフはプレッシャーに押されて守備にまわることをしなかった。イメージを壊さないように曲をつけるのではなく、映像との「ミスマッチ」をテーマに積極的に「オネアミス国」を作り上げたのである。ここに坂本龍一氏のコメントを付記しておこう。

「ミスマッチをやるために、逆にミーティングをたくさんやった。そのシーンのイメージやミスマッチのねらいを何回も話し合った。」

音楽制作陣の意気込みがうかがえる。

以上、「オネアミスの翼・サウンドトラック」のＣＤについていた解説からの確信的推測であり、「．．．らしい」とか、「．．．と思われる」と言った表記は全て省略しているので、間違いがあっても怒らないで下さい。

・トップをねらえ

音楽監督：田中公平

今でこそクラシックの名曲のアレンジに定評のある田中公平氏だが、そのような評価を得たのはこの作品がきっかけである。「トップをねらえ」自体、パロディの塊のような作品であるので、当然音楽においてもパロディ的要素が庵野監督から要求された。その意味でこの人選は大当たりだった。

特に第六話のエンディング「時の河を越えて」は名曲で、六話のストーリー、演出はエンディングを聞きながら泣くために存在している。この曲も既成の曲のアレンジで、「マドンナの宝石」というたぶん映画音楽をアレンジしたものである（母談、未確認情報）が、「エクセリヲンマーチ」が頭と途中と終わりに織り込まれていて、オリジナリティーあふれるものになっている。この曲への入り等、演出も絶妙です。とにかく聞いて頂戴。

・ふしぎの海のナディア

音楽監督：知らない。

はっきりいって、オープニングとエンディングしか覚えてません。別に悪くはなかったと思うけど、２年前に一度通して見ただけなので、忘れちゃいました。

とりあえず、オープニングの最初の方のナディアと、とりまき達の紹介のようなシーンで、それぞれが曲にあわせて７、８拍目にアクションするのがとっても印象的でした。

（以上　志賀）

↑だめっすよ、志賀さん。そんな日和った文章書いてちゃ。秋葉はナディアの音楽が大好きなんだからぁ。というわけで、ナディアの音楽については私がフォローさせていただきます。

・ふしぎの海のナディア

音楽監督：鷺巣詩郎

ナディアの音楽の最大の特徴は、ストーリー上の情景あるいは人物と音楽の主題の間にきれいな対応関係があることでしょう。音楽に注意しながらナディアを見ていると、さながら出来の良い交響詩を聴いている気になってしまいます。

わかりやすい例をあげれば、「ガーゴイルのテーマ」。ガーゴイルの顔とフルオケの荘厳なテーマが一対一対応で脳にこびりついている人も多いはず。他にも「ノーチラス号船内でいつもかかっている曲」「島編でジャンとナディアがいい雰囲気で『来週に続く』の時の曲」「グラタンのテーマ」など、ナディアを通して見た人ならば強く印象に残っていることでしょう。

おもしろい例では「ナディアのテーマ」。ナディアが暗く沈んでいるときは木管で切なげに歌いあげられるフレーズが”ナディア島編で大暴れ”の時には長調に転調して（るよね？）金管で華々しく吹き鳴らされるのである。

おそらく作曲の段階でストーリーがほぼ完成していて、それに沿った曲を依頼したのだろう。結果、ナディアの音楽は他の映像音楽と比べても一流のものとなっている。

余談だが、「新世紀エヴァンゲリオン」の音楽も鷺巣さんなので、非常に期待してるのだが、はてさて・・・？

（以上　秋葉）

愛国戦隊大日本あらすじ紹介

第三話「びっくり！君の教科書も真っ赤っか！」

脚本　岡田斗司夫　監督　赤井孝美

愛国戦隊大日本のリーダー、アイ・カミカゼこと神風猛は有事に備えて体を鍛えている。また彼は読書することも忘れない。通りすがりの本屋で立ち読みする彼は、本という本全てが〇カの本ばかりであることに気づく。驚くカミカゼに店員のふりをした敵戦闘員の魔の手が伸びる。あわやというところで危機を脱したカミカゼだが、そのころ街外れでは「大日本」の敵レッドベアーの一団が、書記長デスマスクのもとで怪力無双のジャボチンスキー将軍と冷酷な女司令官ツングースキラーの指揮により、ひそかにに日本国の〇産化計画を推進していた。純真な子どもの教科書をことごとく〇産主義のものとすり替えて真っ赤にしてしまうという恐るべき「洗脳五カ年計画」である。

そうはさせじと「大日本」は立ち上がる。教科書をコンテナ車に積み替える現場に奇襲をかける「大日本」はアイ・カミカゼを筆頭に、アイ・スキヤキ（白滝肉夫）アイ・ハラキリ（切原弾児）アイ・テンプラ（衣あげる）そして紅一点アイ・ゲイシャ（舞子ユキ）の五人組である。敵の黒マスク、ハラショ・マンをなぎ倒したあとに待ていたのはミンスク仮面のすさまじい火砲攻撃だった。シベリア寒気団攻撃、パルナス・ケーキ投げにたじろぐカミカゼ達だが、ついに必殺の天誅ボールを炸裂させる。

だが、ミンスク仮面は巨大化して向かってきた。「大日本」は秘密兵器・大日本戦艦を出動させ、三機のメカ帝釈天號、毘沙門天號、兜率天號を合体させて、巨大なダイニッポン・ロボに乗り組んで戦う。死闘の末、ついに伝家の宝刀・日本剣を抜き、「日本剣、愛国富士山返し」を炸裂させてミンスク仮面を破るのであった。

本気にしないでね・・・

参考文献、アニメック２８号

ダイコン３・４のあらすじ

・・・とはいってもダイコンのあらすじなんて書いてもしょうがないので、とりあえず見て下さい。これはそもそも日本ＳＦ大会で放映されるために作られたもので、当時から高い評価を受けています。今回特別に入手できたので、皆さんもそのパロディを楽しんで下さい。

トップをねらえ！あらすじ

第一話

宇宙で戦死した父の残像を追って、沖女（＝沖縄女子宇宙高等学校）に入り宇宙パイロットを目指すタカヤノリコ１７歳。しかし彼女はいわゆる劣等生・・・。そんな彼女を励ますのは「お姉さま」ことアマノカズミ。カズミは学内での最優等生で、心優しい美少女、しかも努力家・・・。そこに赴任してくるのは「コーチ」ことオオタコウイチロウ。彼は宇宙戦艦エクセリヲンの乗員にカズミはともかく、よりによってノリコも抜擢するのです・・・。

第一話はところどころ知っている人なら吹き出してしまうようなパロディが隠されています。だいたい「お姉さま」と「コーチ」という設定自体・・・いやまあともかく、一番の見所はなんと言っても「鉄下駄」でしょうか。「稲妻キック」も・・・。

しかしこの話自体、そういった要素（パロディ）を知らない人が仮に見たとしても、メカと美少女という「お約束」を気にしない人なら十分に楽しめるストーリー構成となっています。特に演出には「少女漫画」的な要素（多少ステレオタイプではありますが）をふんだんに使い、野郎が作ったとは思えないくらいの「ヲトメちっく（裏を返せばどろどろの人間関係）」な世界が展開されるのです。

第二話

ヱクセリヲンに乗り込んだカズミとノリコ。カズミはいきなり同僚のユングとライバル意識を燃やします。パイロットとして腕と、コーチへの思いと・・・。そんな折、飛来する未確認物体の確認にカズミとノリコが命ぜられることになります。光の速度の中、彼女が見たものは・・・。

この話ではトップをねらえの重要なファクターの一つである「光速の時間と人間」が初めてあわれてきます。光速度の中では特殊相対性理論により、「相対的に」時は遅く進みます。同じ時を過ごさない人間同士がいかにお互いを感じるか・・・人間の持つ「時」という共同意識がいかに重いものであるか・・・このテーゼは第五六話で、より大きな形となって現れます・・・。

さてそんな思い話に惑わされることなく、この話も楽しめます。ユングの「ジャコビニ流星アタック」、紙にパンチ出力されるデータを素で読んでしまう乗組員・・・もちろんそんな細かいところまで見なくても、ユングのあけすけなキャラや、唐突な入浴シーンでの会話など、楽しめる要素は十分になっています。

第三話

突如カズミからパートナーを首にされたノリコ。失意の彼女は、ワープ中の肝試し大会で知り合ったスミス＝トーレンと新たにパートナーを組むことになります。そして敵との接触。出撃したノリコとスミスは・・・。

全六話となるトップをねらえのターニングポイントと言えそうです。ノリコはこの話で実践の厳しさと愛するものを守れなかった悲しみを経験します。彼女の成長という要

素を語るにふさわしい話と言えるでしょう。特に実戦での演出はシビアなものを感じさせます。あまりのあっけなさが、残酷さを物語っているのです。
もちろん、所々のお遊びに気が付いた方もおられるでしょう。冒頭のカラオケや、ノリコとスミスのかみ合わない会話、艦内を通る鉄道、恒星リーフ６４（＝８×８＝６４）などなど。少しも無駄なシーンなく展開していく話にただただ驚くばかりです。
最後に、コーチとノリコを見つめるガンバスターが印象的ですね。

第四話
任務を終えて地球への帰路につくエクセリヲン。しかしそこに敵が突如来襲し、エクセリヲンは危機にさらされます。そんな中、マシントラブルに見舞われたリンダ（ユングのパートナー）にマシンを貸し艦内待機を命じられたノリコは、自らの情けなさと自分が実戦に参加できない歯痒さに絶望します。そしてエクセリヲンが「特攻」をかけようとするその時・・・。
本来四話完結だった（ように思わせている）トップのクライマックスが第四話で描かれます。宇宙を一つの生命体と見るし、人類をその中の異質なガンと見なす説は、それ自体珍しくはないものの、異様な説得力を持っています。矛盾を抱えた人類がそれでも生き延びようとする姿は、第六話でもかいま見ることができます。
またこの話では自らの責め悩むノリコの心理描写が素晴らしい演出によって得られます。スミスを死なせたことに対する自己嫌悪がいじらしいほど痛々しく厳しく描かれているのです。まあ、それも感動の最終シーンを引き立てるに十分すぎる脇役となっているのですが。
ちなみに私個人としては、この第四話が一番好きです。（「第三艦橋大破」なんか特に（笑））

第五話
コーチが病にあることを知ったまま宇宙に行かねばならないカズミの心理描写がこの話での一番の見所でしょう。コーチの病はあと半年持つか持たないか。しかし光速での任務遂行においては地上での半年という時は瞬く間に過ぎ去ってしまう。ノリコに対していじらしいほど机上に振る舞おうとするカズミ。しかし彼女はガンバスターの乗組員である前に一人の女だった・・・。そんな彼女を初めて呼び捨てにし、励ますノリコ。
この話では、女としての弱さを持つカズミと、いつもの冷静で優秀なカズミが対照的に描かれ、しかも矛盾なく一つの側面を持つ一人の人間として描かれています。一方、お遊びもふんだんに使われ（ｅｘサスケとか）、本来のトップの楽しみも失われてはいないようです。
なおこの話にはエピソード的にしか使われていないキミコとの再会も実は重要な役割を担っています。わずかな時しか過ごしていないノリコと地上での十年の時を過ごしたキミコ。二人はもう笑って冗談を言い、悩みをわかちあう沖女時代の二人ではなくなってしまっていたのです・・・。

第六話

人類はそのエゴイスティックとも言える（しかし生存本能で正当化される）欲望によって、ついに宇宙の銀河をも消滅させてしまおうとする。その是非を論ずるカズミ（＝オオタ中佐）と下士官との会話は、第六話の冒頭を飾るにふさわしいものとなっています。また、タカミの写真を見て自分を自分の父親とオーバーダビングさせるノリコ、カズミの頬を打って、最後のガンバスターの任務をゆずるユング・・・。そして地球で数々の別れを作り宇宙に赴いたカズミ。彼女たちの複雑な想いと無関係に計画は進行します。そして失敗・・・その失敗は皮肉にも再びノリコとカズミが活躍する場を与えてくれることになってしまうのです。再び同じ時を過ごすことのできることを知り、悲しみの中でユングは言います「帰ってきたらオカエリナサイを言ってあげる・・・」そして・・・。

モノクロでしかもワイドフレームで語られる第六話には、数々のパロディ及びお遊びがそこに存在しようとも、それを全く無意味のものとする様々な感動があります。もともとパロディが主で、一般の人間には意味のない面白さから始まったトップをねらえという作品がこういう形で終結したということは、ある意味では非常に意外なことでありますが、ある意味では、演出面でのアニメの可能性をついい有した実験作として優れたものとなったと言えそうです。

科学講座

このトップをねらえという作品が一流の「パロディ+シリアス作品」にとどまらず、背景に壮大な物理学の仮説をしたが得るＳＦ超大作でもあるなんて・・・ていうのはちと言い過ぎですね。でもこの科学講座がＳＦへの挑戦であることは間違いないですね。前提そのものをハチャメチャなものとして、そこから最もらしく物理世界を構築してるかのように見せる・・・。文系の人にはまずつっこむ余地のない素晴らしい出来となっています。（理系の人が見たら「エーテル宇宙」でまず「ヲイヲイ」ということになるでしょうね）

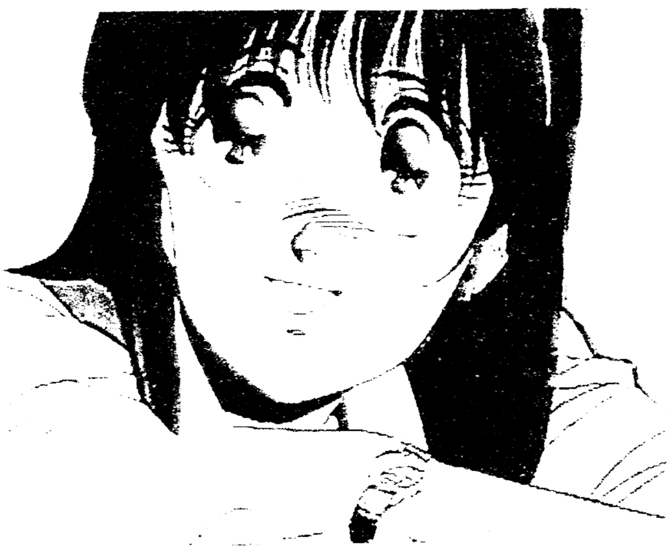
そのほか、ノリコをおたくにしてしまったり、コーチが「努力と根性」をやたら強調したりと、これはもうスタッフの完全なお遊びですね。

最後に

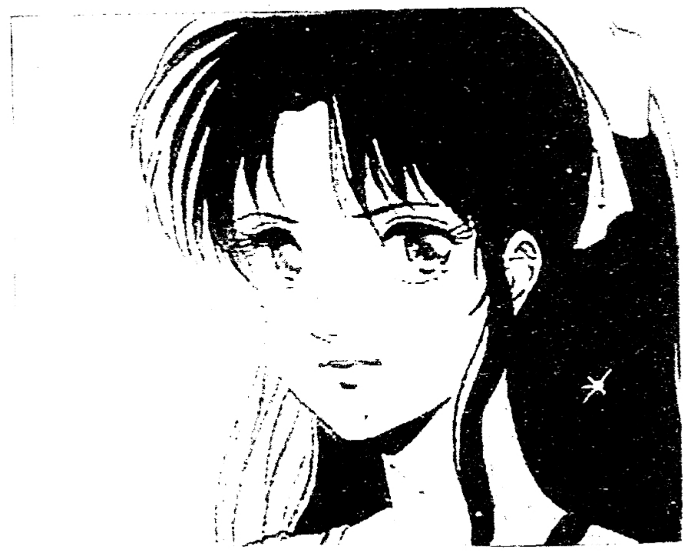
今回はいいたいことの半分も言えたような気がしません。細かい演出に踏み込んでいろいろ書きたいこともあったのですが、それも時間の関係でできませんでした。また文章もところどころ破綻をきたしてしまって、自分でも何をいいたいのか・・・ああ、本当に申し訳ないと思います。

しかし本当は私のようなものがぐだぐだ書いたところで本当のトップをねらえの魅力が分かってもらえるとは思っていません。私がトップをねらえを見て心に感じたようなことは、トップを面白いと感じることのできる人ならすぐに分かってもらえるだろうし、トップを面白くないと感じる人には決して分かってもらえないでしょう。それはこの作品が「視聴者を選ぶ」ことを意味するのではなく、それだけ視聴者の共通認識を越えた潜在的な無意識に語りかけるものであることを意味しています。（まあ、芸術作品とは

凡そそういうものなのでしょうが・・・）
　私は今回この原稿のためにトップを再視聴したわけですが、高校の頃初めて見たときと同じ感動が私を襲いました。それは私が成長していないということではなく（あれ、そうなのかな（笑））このトップという作品がそれだけ心に直接語りかけるものであるということなのでしょう。誰がなんといおうと、この作品は数年来ｍｙ　ｆａｖｏｒｉｔｅ　ａｎｉｍａｔｉｏｎであり続けているのです。



ノリコ



カズミ



コーチ



ユング

トップをねらえ！主要登場人物紹介

タカヤノリコ（日高のり子）：この物語の主人公。幼い頃から提督であった父の背中を見て育ち、自分も大きくなったら宇宙へ行くことを心に決めていたのだが、父は戦死してしまう。そして彼女は宇宙へ行くために沖女に入学する。しかし彼女は劣等生、そんな彼女を暖かく見守るお姉さまと友人のキミコに守られて、彼女は頑張る。そしてコーチによりガンバスターの候補生に抜擢される。それも彼女の運動神経が買われたのである。努力と根性とともに宇宙怪獣に立ち向かう彼女を待ち受けるのは一体なにか！？彼女の成長は物語の大きな柱である。（だが、設定では宇宙一のオタクであるようだ・・・）Ｂ８０．Ｗ５８．Ｈ８３

アマノカズミ（佐久間レイ）：沖女のエリート、バラのお姉さま。まさにその名にふさわしい彼女の行動と発言。マシーンロボを自在に操り、ガンバスターの候補生として必死に努力する。コーチに想いを寄せていてるが口に出せないでいるままで、それでも彼女は宇宙で戦う。第五話では、そんな彼女の女性らしさと弱い心が存分に描かれる。そしてのり子といっしょに地球を、人類を守るのであった。Ｂ８３．Ｗ６０．Ｈ８５

オオタコウイチロウ・コーチ（若本規夫）：のり子の父親、タカヤ提督の率いるルクシオン艦隊の生き残り。提督を助けられなかったことを悔やんで、ガンバスターのパイロット育成のためにその後の人生をかける。宇宙放射線病に侵されて余命幾ばくもないのにもかかわらず、彼は生き、そしてノリコを鍛える。人類を破滅から救うために・・・。最後にはカズミと結婚して、その短い一生を終える。

ユング・フロイト（川村万梨阿）：月面育ちで宇宙戦争の天才と呼ばれている。シルバースターにたどり着いたカズミにライバル意識を燃やして、決闘を申し込む。必殺技はジャコビニ流星アタック。感情の起伏は激しく気も強い女性であるが、いいヤツである。第五話と第六話の間では、地球に残っているカズミの代わりにガンバスターの操縦をしていることを知っていると、第六話がより深く味わえる。Ｂ９５．Ｗ６４．Ｈ９３

ヒグチキミコ（渕崎ゆり子）：ノリコの同級生で、一番の親友。ノリコといっしょに過ごしていてなんでも相談でき、喜びも悲しみも共有でき、冗談を言い合ったりできたのであるが、ノリコが宇宙へ行ってからは縁遠くなる。久々に地球に帰ってきたノリコと出会った彼女は、もうノリコと何年も歳の差ができてしまっていた・・・。

スミス・トーレン（矢尾一樹）：ノリコの初恋の人でもある宇宙パイロット。お姉さまに見捨てられ、コンビを解消されたノリコとコンビを組む。水兵として船に乗り込み、うまく立ち回ってパイロットになった苦労人である。

トップをねらえ！第五話より

愛に時間を・・・

片岡　徹也

「お願い、愛に時間を・・・」。四話までのタイトルとはうって変わったシリアスなタイトルだ。「トップ」の第五話はいわゆる「浦島効果」、つまり亜光速飛行を行う宇宙船の中では時間経過の速度が落ち、周囲との間に時間的ギャップが生じるという法則を話作りに盛り込んだという理由で、好きなエピソードである。

光速に近づけば時間の経過が遅くなるという考えはかのアインシュタインに主張された有名な法則であるが、実際生活からは想像しづらく今一つ信じられないような気がする。ところが第五話ではこの「浦島効果」とはいかなるものなのかという事を分かりやすく表現し、感動に結びつけている。

参考までに第五話のストーリープロットを紹介しよう。不治の病にかかり余命幾ばくもないオオタを心配しながらも、カズミは銀河の彼方に出撃する。星間ワープ中では、わずか数分に過ぎないのに、地球上では一日また一日と時間が過ぎていく。地球に戻ってきたときにはすでにオオタがいないのではないかという不安が胸中に生まれ、カズミは思い悩む。そんなカズミをノリコは励まし、二人は迫りくる宇宙怪獣に挑んでいく・・。

やはり、第五話の妙は「浦島効果」を見る者の心に最も素朴に訴えかける愛情と結びつけたことにあるのだろう。途中で「もうこれ以上進めない」と加速を止めるカズミの姿は、心に刺さるものがある。彼女の気持ちが痛いほど伝わってきて、良くできた演出である。

また第五話ではガンバスターの力強い合体シーンが初めて描かれ、宇宙怪獣を次々と撃破する勇姿が画面に登場する。こうしたメカアクションは当然のことながら素晴らしいのであるが、操縦者であるノリコやカズミの気持ちを視聴者が共有できるからこそ、迫力が増すのではないだろうか。

ラストのオオタの待つ病院にガンバスターが降り立つ場面や出迎えるオオタとそこに駆け寄るカズミの様子などを見ると、ほっとした気持ちになる。やはり、こうした人間の心に訴えかける作品づくりが大切なのだと思わずにいられない。

論理的過程と物語の展開がうまくかみあったエピソードであったと言えよう。

GAINAXの手がけたＯＶＡ

哭きの竜　１～３巻（’８９～’９０）

哭くことによって強運を呼び込む一人の雀士がいた。その名を竜という。極道の男たちが彼の強運を手に入れようとして竜に挑む。彼を中心とした極道達の運命を描いた物語である。

極道の男たちはなぜ竜を求めるのか、彼らとて竜がそばにいるだけで本当に強運を手に入れられるとは思っていなかっただろう。しかし、それにもかかわらずなぜ竜を求めたか。それは、竜のなにものにもとらわれず、自由に戦い続ける姿に己の夢を見ていたからではないだろうか。彼を追い求めることこそ、あこがれを追い求めることだったのではないだろうか。

アップルシード（’８８）

第三次世界大戦後、世界統一を行ったのは総合管理局という集団で、実験理想都市オリンポスを中心に、その運命はバイオロイドという亜人類によって行われた。この全ての快適さを備えた都市でなにか喪失感に苛まされた人間達をテロ事件を通じて主人公の警察達を中心に描いた、士郎正宗原作の作品である。

ビートショット（’８９）

ゴルフの天才で財団の御曹司という巨人の星の花形みたいな花祭昭彦（性格は風祭！）そして主人公でゴルフの野生児流石今日一。（だからといって彼は猿ではない）彼らは青華大ゴルフ部に入部した。

歓迎会後、試合が行われ、パターン通り今日一と昭彦が激突する。一進一退の試合が続く中、昭彦は今日一の「女に弱い」という「ザ・サムライ」の地祭君と全く同じ弱点を見つける。そこで花祭はキャディーの美佐子を味方に付け、セクシーな妨害をさせる。そのため今日一はめためたになってスコアを崩す。そして１８番ホール、今日一はウォーターハザード出しの１０メートルスーパーショットを決めなければ敗北が決定的となってしまうのだが・・・。

週刊プレイボーイに連載しているだけあって、内容半分、H半分。これがなぜアダルトに分類されないのかよくわからない。「アダルト」との境界線て一体・・・。

また、なぜがイナックスがこの作品を企画したのかも不明。もしかして、岡田斗司夫氏がプレーボーイを見て「これだぁ」と言って集英社に掛け合ったからだったりして。

炎の転校生

俺の右手が真っ赤に燃える。
勝利をつかめととどろき叫ぶ
爆裂　　国電パンチ！！（うそ　ジャロにかわっておしおきよ）

（以上　濱家）

タイムテーブル

２４日	１０：００～	ナディア	＃１～４
	１２：００～		＃５～８
	１４：００～		＃１３、１５、１６
	１５：３０～		＃２１、２２
	１６：３０～		おまけ劇場
	終了後	ダイコン３・４	
２５日	１０：００～	おたくのビデオ	
	１０：４５～	ダイコン３・４	
	１１：００～	オネアミスの翼	
	１３：００～	ナディア	＃３５～３９
	終了後		おまけ劇場
２６日	１０：００～	ダイコン３・４	
	１０：１５～	愛国戦隊大日本	
	１０：４５～	トップをねらえ	＃１～６
	１４：００～	岡田斗司夫氏による講演	
	終了後	ナディア	おまけ劇場

奥付　発行者　東大アニメーション研究会
　　　発行日　１９９５年１１月２４日

編集後記

やたらと字ばかり多いパンフレットになってしまいましたが、ゲスプリの都合であんまり絵がいれられなかったのでご勘弁下さい。

あと、資料をいろいろと探しては見たのですが、余り調べることができないところもあったので、満足できていない点なども多々あります。

この企画を手伝ってくださった多くの人に感謝を、そして岡田さんに特に大きな感謝をいたします。

執筆陣

片岡徹也　愛に時間を・・・　エレクトラの残像

大喜智明　おたくのビデオ　あらすじ・登場人物紹介

志賀信泰　GAINAX音楽紹介

濱家淳一　GAINAXの手がけたＯＶＡ

秋葉晴樹　GAINAX音楽紹介

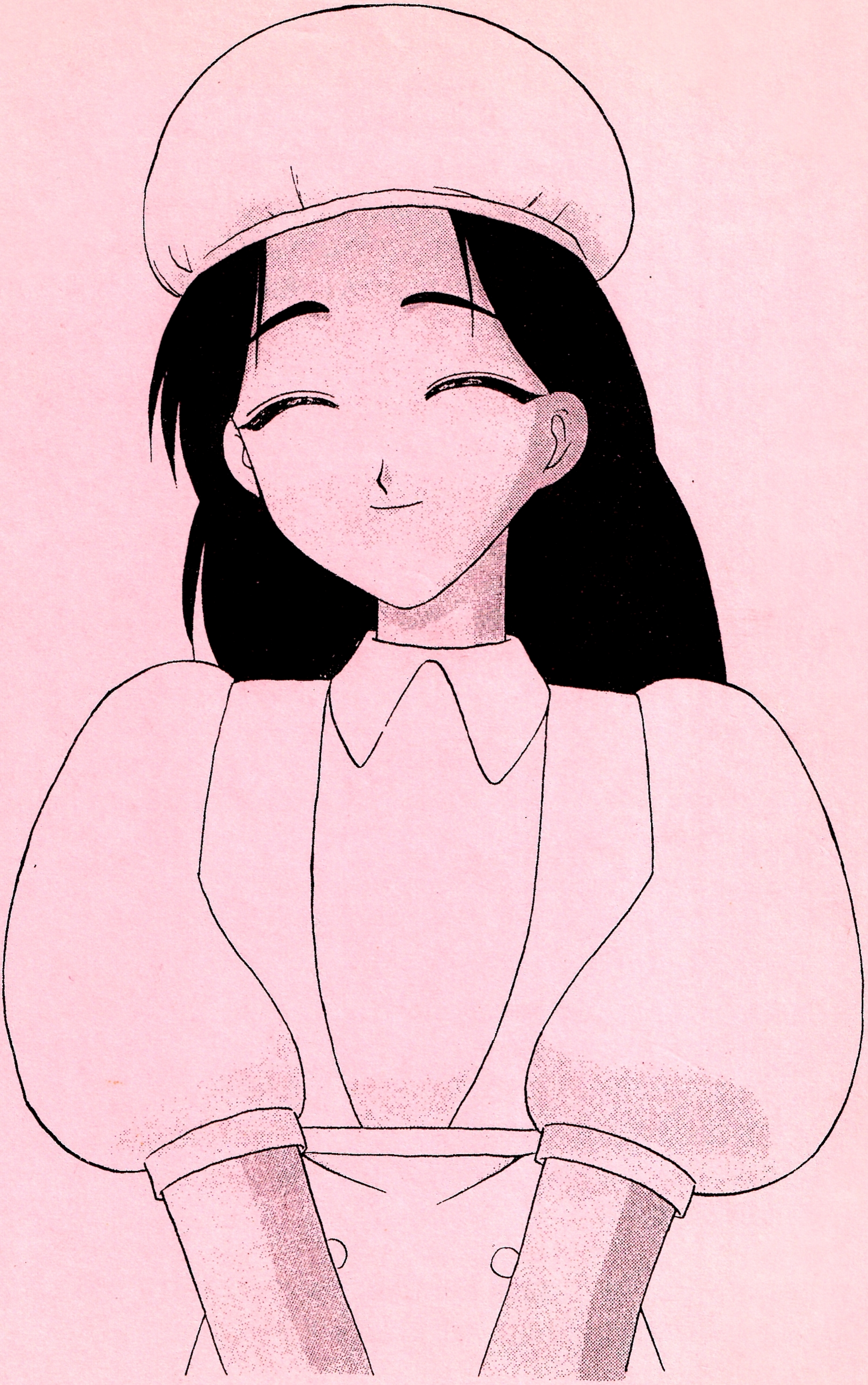
有住俊彦　オネアミスの翼　あらすじ・登場人物紹介

大橋康史　ナディア　あらすじ

辻本武之　トップをねらえ　あらすじ

羽田裕亮　その他

このパンフレットに掲載された内容についてのご意見ご質問、苦情などは東京大学学生会館２０１Ａまでお寄せ下さい。



東京大学アニメーション研究会